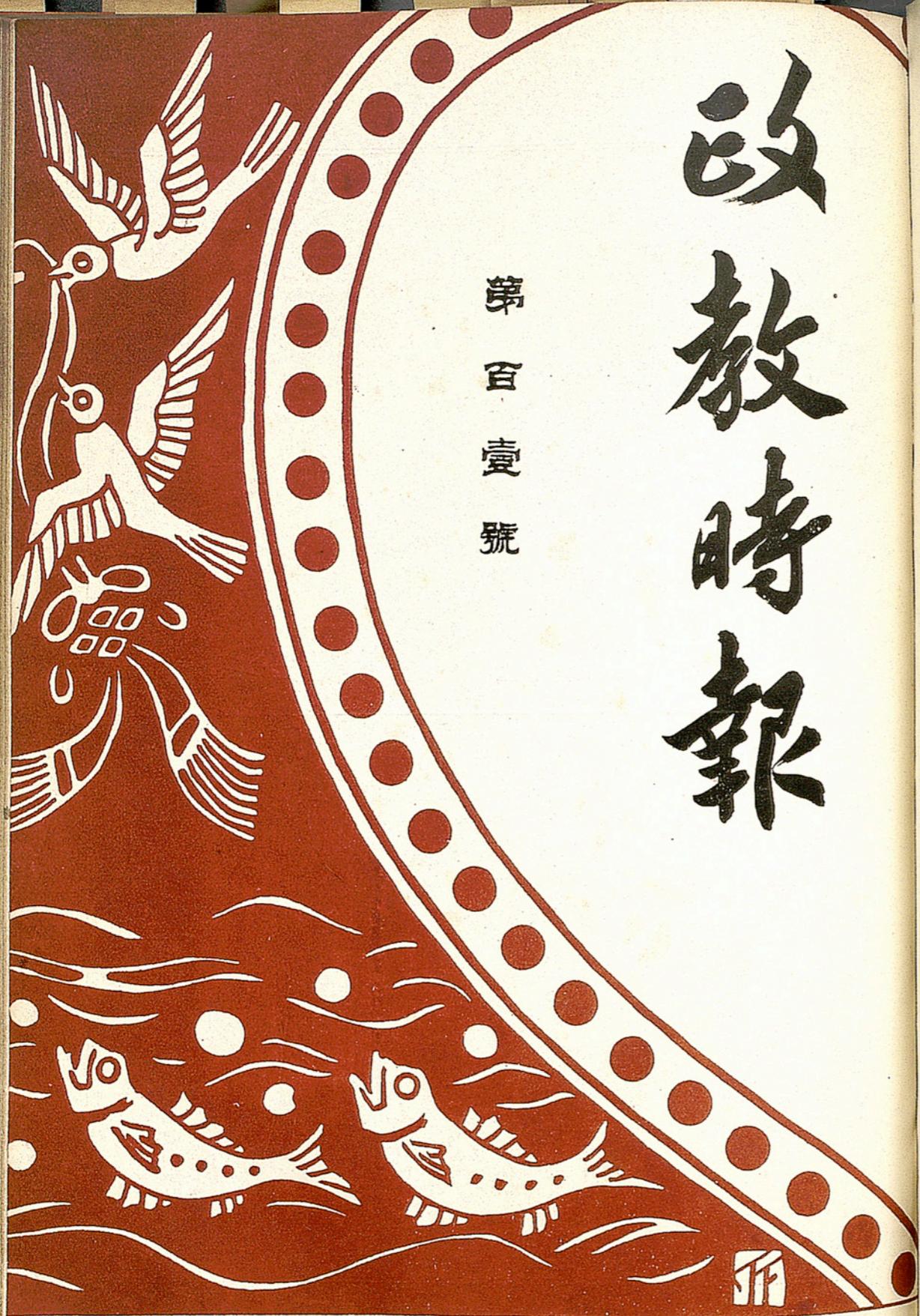


# 政教時報

第百壹號



可認物便郵種三第省信遞日六廿月二十年一十三治明  
(行發日八回一月每) 行發日八月五年六十三治明





もの、慥かに社會鼓吹者たるの資格を具ふる者と謂はざるべからず。實に彼は柔和寛容の權化也、慈悲博愛の結晶也。彼の人に對するや一見舊知の如く、上下の區別なく、貧賤の差等なし、彼が他の言論に耳を傾くるや、溫和親愛にして恰も他を善導し、感化せむことをのみ樂となせるが如し。彼の告白する所は悉く實驗の結果なり、彼の論議する所は力行以て自ら證明せざるはなし。彼は生ける宗教なり、彼は働ける信仰なり、其云ふ所單純なり、然れども泰西の宗教之が爲めに其意義を一變せむとし、其主張する所簡潔なり、然れども歐米の文明之が爲に根柢より破壊せられんとす。請ふ吾人をして少しく彼が信仰の如何を檢せしめよ。

彼嘗て人の宗教教育につきて、意見を徵せしものありし時、之に答ふるの書に曰く。  
予にして、予が眞正と考ふる宗教教育を兒童に施さむと欲する時は、予は單に下の如く教ゆるのみ。即ち吾人の此世に來り且つ生存する所以のものは、吾人自身の意志に従ひて放縱なる生活を爲すが爲ならず、唯絕對者の意志に従はむが爲なり。故に若し其意志の命ずる所を實行し遂ぐるを得ば、實に是れ予は絕對と共にある也。

此絕對の意志なるものは、吾人の凡てを幸福ならしめむとするに在り。而して吾人の凡てが幸福ならむとするは唯一の方法ある耳、即ち他人が自己に對して行はむことを冀望

するが如き行爲を、亦自己が他に對して實行するに在るのみ。

次に世界は如何にして成立せしや、又吾人の死後に關して如何に考ふべきかの二問題に付きては、第一の問題に答ふるに予は何等の知識をも有せざることを公言し、且つ宗教としては此の如き問題は寧ろ奇怪に屬するを以てすべし。現に佛教の行はるゝ世界にありては、此の如き問題は存立せざるにあらずや、進みて第二の問題につきては、左の如き推量を以て答ふるの他あらざる也。曰く。吾人をして平和幸福ならしむる爲めに、此人世に吾人を呼び入れたる絶對者は死後と雖、恐くば同一の目的に向て吾人を導くべしと云へる確信是也。

是最も簡明に彼が宗教觀を盡せるもの、蓋し伯が自ら其世界の眞髓を摺み來りて之を吾人の眼前に示せしもの。實に彼が著述として、彼が會話として世上に傳はるもの幾百千卷、而して此の如く一言にして彼が信仰を披瀝するものを見ず。彼は宗教に關し、社會に關し、或は國家を論じ、戰爭を議し、日に歐米の讀書界に、絶えず小冊子を出版して貢獻すと雖、畢竟此簡明なる彼が信仰より演繹し來る社會改良論の外なき也。吾人は進みて其信仰の内容を味はむかな。

吾人は以爲らく、彼は宗教を以て人生の意義を闡明するものとなし、一に絕對者の意志に従ひて、之を社會上に實現す

るを以て目的となせり。而して彼が信仰に於ける最も特徴とすべき者二あり。曰く、第一に無限の寛容第二に嚴格なる實行是也。彼は無限の寛容を主張して曰く、絕對は無限に罪惡を宥恕する者也、故に人は他人の惡に對して絕對に寛容ならざるべからず、他人の惡に對して寸毫も抵抗すべからず、正義の名の下に惡を罰することあるべからず、如何なる名義を以てするも、惡に對するに威力を以てするは、惡に對するに惡を以てするもの、何の時か其惡を勦絶して平和の世界を開闢すべきの理あらむや。彼は絕對に平和を主張す、彼は怒の罪惡を説けり、彼は裁判の不可を説けり、彼は國家の不道理を離せり。而して威力と干戈に關する文字は惡魔の如く之を嫌惡し、社會をして和氣團々として春風の中に歡語するが如くならしめむとするは是彼が理想也。彼は其目的の平和なるが如く、其手段も亦平和なり、目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へること有は爾曹が聞し所なり、然れど我なんちらに告ん、惡に敵すること勿れ人なんちの右の頬を打ば、亦ほかの頬をも轉して之に向よとは、是れ彼が信仰の極致也、福音の眼目也。愛の福音は此に在りてお秘奧に達し、絕對の意志此に收まりて亦余蘊なし。次に彼は嚴格なる實行を主張して曰く、吾人は此絕對の意志を實行せむには如何なる困難も辭すべからず、又如何なる口實の下にも毫も寛假を與ふべからず。福音の文字は其文字の如く解釋せよ、意味の曖昧は

畢竟強辯の下に自己の罪惡を修飾せむとするより起る。彼は以爲らく福音は實行し難きに非ず、人之を實行せざる也。人之を實行すれば人生の破壊を招き、生存の危殆を來すが夢想するものあるも是全く誤謬なり。若し果して絕對の意志の指導するが如く實行せむか、必ずや平和なる世界を開き幸福なる天國を來さむ。而して彼は實に自身に於て實行しつゝある也。家庭に於て其理想を實現しつゝある也、彼は其富を散して貧民を恤はせり。彼は著作權を放棄して其思想を宣傳せり。實に彼が嚴格なる實行を説くや秋霜烈日の如く、人をして森嚴頭を擧ぐる能はざらしむるものあり。若し右の眼なんちを罪に陥さば袂出して之を棄よ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり。若し右の手なんちを罪に陥さば之を斷て棄てよ、蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れりとの福音は、最も能く彼が實行主義を闡明したる訓誡なり。

此直截簡潔なるトルストイの福音は、歐洲文明の根柢に向て一刀を下せる者也。殊に歐洲の社會と始終表裏の關係を有する新、舊、希臘、羅馬の諸教會の權威を轉覆する者也。吾人は敢て原始的基督教につきて論せず、少くとも羅馬教會已後の基督教はトルストイの所謂福音と正反對の方向に發達せるものなり。吾人強て一言にして之を論ぜむか、教會が神の權威の下に國家の政權を濫用し、遂に地獄の猛火をして世界

に實<sup>じつ</sup>を<sup>ま</sup>せし<sup>む</sup>るに<sup>至</sup>りたるは<sup>中</sup>世<sup>中</sup>教<sup>教</sup>國<sup>國</sup>時<sup>時</sup>代<sup>代</sup>の<sup>真</sup>相<sup>相</sup>なり。國<sup>國</sup>家<sup>家</sup>か<sup>神</sup>の<sup>名</sup>を<sup>借</sup>して<sup>漫</sup>に<sup>其</sup>權<sup>威</sup>を<sup>稱</sup>し、<sup>漫</sup>りに<sup>劍</sup>を<sup>出</sup>して、<sup>強</sup>奪<sup>奪</sup>呑<sup>呑</sup>噬<sup>噬</sup>の<sup>慾</sup>を<sup>逞</sup>く<sup>す</sup>るは<sup>近</sup>世<sup>世</sup>國<sup>國</sup>教<sup>教</sup>時<sup>時</sup>代<sup>代</sup>の<sup>真</sup>相<sup>相</sup>也。正<sup>正</sup>義<sup>義</sup>の<sup>名</sup>一<sup>一</sup>た<sup>た</sup>ひ<sup>稱</sup>へ<sup>ら</sup>れて<sup>人</sup>之<sup>之</sup>を<sup>標</sup>榜<sup>榜</sup>して<sup>神</sup>の<sup>意</sup>志<sup>志</sup>と<sup>稱</sup>し、<sup>神</sup>權<sup>權</sup>の<sup>說</sup>は<sup>忽</sup>ち<sup>擁</sup>せ<sup>ら</sup>れて<sup>壓</sup>制<sup>制</sup>の本<sup>本</sup>尊<sup>尊</sup>と<sup>なる</sup>。我<sup>我</sup>は<sup>平</sup>和<sup>和</sup>を<sup>出</sup>さ<sup>む</sup>が<sup>爲</sup>めに<sup>來</sup>るに<sup>非</sup>ず、<sup>劍</sup>を<sup>出</sup>さ<sup>む</sup>が<sup>爲</sup>に<sup>來</sup>るなりとの<sup>福</sup>音<sup>音</sup>は、<sup>如</sup>何<sup>何</sup>に<sup>屢</sup>々<sup>々</sup>口<sup>口</sup>實<sup>實</sup>に<sup>供</sup>せ<sup>ら</sup>れて、<sup>腥</sup>血<sup>血</sup>を<sup>以</sup>て<sup>世</sup>界<sup>界</sup>歷<sup>歷</sup>史<sup>史</sup>の<sup>頁</sup>を<sup>汚</sup>し<sup>去</sup>り<sup>し</sup>か。トルストイは<sup>根</sup>本<sup>本</sup>的<sup>的</sup>に<sup>歐</sup>洲<sup>洲</sup>現<sup>現</sup>時<sup>時</sup>の<sup>文</sup>明<sup>明</sup>なる<sup>もの</sup>を<sup>否</sup>認<sup>認</sup>せる<sup>もの</sup>、<sup>如</sup>何<sup>何</sup>に<sup>其</sup>大<sup>大</sup>膽<sup>膽</sup>に<sup>し</sup>て<sup>影</sup>響<sup>響</sup>の<sup>大</sup>なる<sup>か</sup>を<sup>み</sup>よ。彼<sup>彼</sup>は<sup>雷</sup>に<sup>國</sup>家<sup>家</sup>若<sup>若</sup>くは<sup>教</sup>會<sup>會</sup>其<sup>其</sup>物<sup>物</sup>を<sup>否</sup>認<sup>認</sup>するに<sup>非</sup>ず<sup>して</sup>、<sup>其</sup>火<sup>火</sup>を<sup>救</sup>ふ<sup>に</sup>火<sup>火</sup>を<sup>以</sup>て<sup>し</sup>、<sup>血</sup>を<sup>以</sup>て<sup>血</sup>を<sup>洗</sup>は<sup>む</sup>と<sup>す</sup>る<sup>根</sup>本<sup>本</sup>思<sup>思</sup>想<sup>想</sup>に<sup>反</sup>對<sup>對</sup>する<sup>もの</sup>也。故<sup>故</sup>に<sup>彼</sup>は<sup>一</sup>方<sup>方</sup>に<sup>國</sup>家<sup>家</sup>及<sup>及</sup>ひ<sup>ひ</sup>教<sup>教</sup>會<sup>會</sup>の<sup>壓</sup>制<sup>制</sup>を<sup>痛</sup>撃<sup>撃</sup>する<sup>と</sup>共<sup>共</sup>に、<sup>現</sup>時<sup>時</sup>歐<sup>歐</sup>洲<sup>洲</sup>の<sup>天</sup>地<sup>地</sup>に<sup>將</sup>に<sup>火</sup>燄<sup>焰</sup>を<sup>高</sup>め<sup>む</sup>と<sup>す</sup>る<sup>過</sup>激<sup>激</sup>なる<sup>社</sup>會<sup>會</sup>主<sup>主</sup>義<sup>義</sup>者<sup>者</sup>に<sup>向</sup>て<sup>反</sup>對<sup>對</sup>する<sup>者</sup>也。予<sup>予</sup>を<sup>以</sup>て<sup>之</sup>を<sup>見</sup>る、<sup>過</sup>激<sup>激</sup>なる<sup>社</sup>會<sup>會</sup>主<sup>主</sup>義<sup>義</sup>は<sup>國</sup>際<sup>際</sup>的<sup>的</sup>兵<sup>兵</sup>力<sup>力</sup>の<sup>争</sup>闘<sup>闘</sup>を<sup>一</sup>變<sup>變</sup>して、<sup>財</sup>産<sup>産</sup>的<sup>的</sup>貧<sup>貧</sup>富<sup>富</sup>の<sup>争</sup>闘<sup>闘</sup>に<sup>變</sup>形<sup>形</sup>したるに<sup>過</sup>ぎ<sup>さ</sup>るのみ。其<sup>其</sup>火<sup>火</sup>を<sup>以</sup>て<sup>火</sup>を<sup>救</sup>ひ、<sup>血</sup>を<sup>以</sup>て<sup>血</sup>を<sup>洗</sup>は<sup>む</sup>と<sup>す</sup>るに<sup>至</sup>りては<sup>乃</sup>ち<sup>一</sup>也。之<sup>之</sup>を<sup>要</sup>するに<sup>歐</sup>洲<sup>洲</sup>の<sup>文</sup>明<sup>明</sup>は<sup>衝</sup>突<sup>突</sup>の<sup>結</sup>果<sup>果</sup>也、<sup>争</sup>闘<sup>闘</sup>の<sup>歷</sup>史<sup>史</sup>也。而<sup>而</sup>して<sup>トル</sup>ストイ<sup>イ</sup>の<sup>如</sup>く<sup>絶</sup>對<sup>對</sup>の<sup>争</sup>闘<sup>闘</sup>を<sup>否</sup>認<sup>認</sup>して、<sup>其</sup>理<sup>理</sup>想<sup>想</sup>を<sup>實</sup>現<sup>現</sup>せ<sup>む</sup>と<sup>す</sup>る<sup>もの</sup>未<sup>未</sup>だ<sup>だ</sup>嘗<sup>嘗</sup>て<sup>見</sup>ざる<sup>所</sup>なり。宜<sup>宜</sup>なる<sup>哉</sup>。人<sup>人</sup>皆<sup>皆</sup>彼<sup>彼</sup>を<sup>以</sup>て<sup>ルー</sup>ソ<sup>ソ</sup>ー<sup>に</sup>比<sup>比</sup>するに<sup>至</sup>るや、<sup>將</sup>來<sup>來</sup>彼<sup>彼</sup>が<sup>思</sup>想<sup>想</sup>が<sup>如</sup>何<sup>何</sup>なる<sup>程</sup>度<sup>度</sup>まで<sup>歐</sup>洲<sup>洲</sup>の<sup>天</sup>地<sup>地</sup>を<sup>燒</sup>き<sup>盡</sup>す<sup>べき</sup>か、<sup>蓋</sup>し<sup>思</sup>想<sup>想</sup>界<sup>界</sup>中<sup>中</sup>近<sup>近</sup>時<sup>時</sup>の<sup>壯</sup>觀<sup>觀</sup>也。

然れども彼は亦時代の子たることを免るべからず。蓋し彼は歐洲に於ける生存競争の活劇に向て奮激して起れるもの、而して他の一方の極端に走りて力を以て唯一の手段とし、強硬の意志の習養を本領として、強者の勝利を主張するもの之をニーチェとす。是實にトルストイと恰も反對の方向に走りたるもの、何れも是れ現代歐洲の實況を洞察し、人生の機微を穿ちて滿腔の熱情を披瀝したるに至りては乃ち一也。されどニーチェは奮激一番人生の暗黒點を極端に主張し根本的に宗教を否認し、道德を破壊し、慈愛を以て病的現象とし、同情を以て人間の弱點となすに至り、之に反してトルストイに至りては、全く力を否認して愛を主張し、戦争を否認して同情を主張す。若しニーチェを以て泰西文明の頂點に達したるものとせば、トルストイは泰西思想家の未だ曾て道破せざる所、蓋し、十九世紀二十世紀の交に於ける最も興味ある對比たらずむはあらず。

トルストイの書を繙くものは、彼か如何に東洋聖賢の書を精讀せるかを知らむ。以て冥々の間偉大なる感化を受けしこと明らかなり。吾人はトルストイか泰西の舞臺に空谷の聲音として嘖々傳へらるゝ所のものは、東洋古來の聖典に於て如何に著しく傳へらるゝかを知らむ。トルストイか信仰の根本義たる抵抗する勿れの原理が如何に能く次の説話に於て明瞭に顯現せらるゝかをみよ。

佛陀の教團に争闘起りたる時、佛陀其弟子に對して過去の本生を説きて曰く。

嘗てペナレスに於てカーシーのプラーマダッタと名くる力強き王在せり。彼コサラ國の王、デルゲーチに對して戦はむと欲せり、是コサラの王國は小にして抵抗すべからずと思へばなり。

デルゲーチ王はカーシー國王に抵抗すへからざるを見て、其國を敵の手に渡して、遠く遁れ、諸方を流浪して遂にペナレスに來りて陶器師として、其夫人と共に平安なる生活を送りたりき。

夫人、男兒を誕生せり。名けてデルカニューといふ。彼生長したるの後父王以爲らく、プラーマダッタ王は其復讐を謀らむことを恐れて、我等三人を發見して殺戮し去らむことを欲すること明かなりと、乃ち其子を他に遁れしめ其難を避けしめたり。此時既にデルゲーチは十分なる教育を受け、學問技藝通せざるはなかりき。

此時デルゲーチの理髮人ペナレスに住せしが、其舊主を賣りて之をプラーマダッタに訴へたり。彼直ちに之を逮捕し處刑せむとす。

デルゲーチ捕へられて、ペナレスの町を通るとき、彼は其父母を見舞はむとて歸り來る其兒を見。捕吏の爲めに其子たることを悟られむことを恐れつゝ、空を仰ぎ獨語して其

最後の遺言を通じて曰く、「我兒デルカニューよ、長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ、息めらるべし」と。

コサラ王は彼の妻と共に所刑せらる。デルカニューは強き酒を買ひ來りて番兵を酔倒せしめ、懸て夜となりし時、彼は積み重さねられたる薪の上に兩親の屍を横へ尊敬と宗教の儀式とを以て之を火にす。

プラーマダッタ王之を聞いて畏れを抱けり。何となればデルゲーチの子デルカニューは、彼の兩親の死に對して復讐せんと欲し、好機を見て彼を暗殺せんと考へたればなり。年若きデルカニューは深林に往きて心ゆくまで泣きたるが、やがて涙押し拂ひてペナレスに歸れり。茲に彼は王の象小屋に助手の入用なるをきき、採用せられんとを請ひ、象小屋の主によりて雇はるゝことを得たり。時に王は彼の心を樂ましめんが爲めに、夜をこめて微妙なる音樂と笛の音にふるゝ歌をきかんと欲するにあたり。彼の臣下の中に此の唱ひ手を求めたるが、象小屋の主は其配下に年若き上手のものありて、同僚の間に愛せらるゝものあるを告ぐ。彼等は彼に語るに笛に合せて唱歌し以て王の心を樂ましめんが爲めに唱ひ手と成らむことを以てせり。

茲に王は此若ものを呼出したるが、少なからず王の心に叶ひ、王城の内に採用することとせり。若もの、機敏なる働

きと職務の執行に厳正なるを見たる王は、遂に彼を侍臣の列に加ふるに至りぬ。

或時王は狩に出て従者と相失し、獨りチルガユーと相對せしが。王は狩の疲れに堪へざりけん、チルガユーの膝を枕として眠れり。

こゝにチルガユーは考へぬ。此王プラーマダツタは吾々に大害を興へ、吾等の王國を奪ひ、吾兩親を殺せり。而して彼の運命はかゝりて吾掌中にありと。かく考へつゝ、彼は彼の佩劍を抜き放ちしが、其時彼は急に「長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ息めらるべし」との、彼か父の今はの際に残したる遺言を想ひ浮べたるを以て、再び劍を鞘に收めぬ。

王は眠安すからざるを感して目覺めぬ。若ものは「王よ何故に驚き玉ふかと問へり。王答ふらく、予の眠は若きチルガユーが劍を提げて吾に向ひ來るを夢みるか爲めに、常に安すからざるなり。今予が茲に汝の膝を枕として眠るにあり、再び畏るべき夢に襲はれ、恐怖と驚きとを以てかくは目覺めたるなり」と。

爰に若ものは彼の左手に王の危害を防ぐに由なき首を捕へて、右手に劍をぬきて叫ぶらく。余は汝の爲めに其王國を奪はれ、我母なる彼の妻と共に戮せられたるチルギーチ王

怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりてのみ息めらるべければとの意なりしなればなり。王よ、汝は我兩親を殺せり、吾若し汝の命を絶たば汝の黨與また我命を絶つべし。而してまた我黨與は汝の黨與の命を絶つべし、斯くて怨に次ぐに怨を以てし何の時か怨の果つべき時あらんや。然ども今汝は我命を許し、我亦汝の命を許せり、かくて怨なきによりて怨みは鎮むることを得べきなりと。

茲に、カーシー王プラーマダツタは想へり、若きチルガユーは其父の言葉をかくまて精細に解し盡したるとの賢さよ是に於て王は彼に還すに彼の父の軍隊と輜重と領土と財寶と倉庫とを以てし、且つ彼女を彼に婚嫁せしめたりと。

之をトルストイ伯の無抵抗主義に對比して讀者果して如何の感かある。吾人は佛陀の理想と教訓が如何に圓滿にして、且つ崇高なるかを見て轉た鎮仰に堪へざるもの也。而して此の如き原始佛教が圓熟醇化の極に達したる、現時の信仰論に至りては他日之を論せむ。唯吾人は彼の崇高なるトルストイ伯の人格と、實驗より迸り出てたる彼が信仰を紹介して、聊か偉人の面目を描くこと此の如し。

の子チルガユーなり、今や復讐の時は來れり」と。

王はチルガユーのあはれみを請ひつゝ、彼の手を舉げていふやう、願くは我命を許せ、願くは我命を許せ、我親愛なるチルガユーよと。

チルガユーは惡意なく云へり。王よ余は如何にして王を許すの力あらむや。却て我生命は汝の爲めに危くせられたるに非ずや。王よ我命を許さざるべからざるは却て汝にあらざや、と。

王また云へり。「さらば親愛なるチルガユーよ、汝は先づ我命を許せ。然らばわれまた汝の命を許さん」と。

かくてカーシーの王プラーマダツタと若きチルガユーとは互に其命を許し、手に手をとりに今後互に害せざるべきことを誓ひり。

プラーマダツタ王は、若きチルガユーに云ひけるよ。汝の父は將に死せんとする時、何故に長く視され、短く視され、如何となれば怨は怨によりて息むべからず、怨は怨なきによりて息めらるべしと云ひしか。そも汝の父は之によりて何を意味せしかと。

若ものは答へて云ひけるよ。王よ、我父は將に死せんとする時、長く視されと云ひしは、汝の妬みをして永く續かざらしめんことを意味し、短く視されと云ひしは、汝の友と争を急ぐことなかれと云ふを意味せり。何となれば怨は怨

《感應》

雲 棲 大 師

拜啓其後御健勝奉賀候。拙者昨今アイルランド地方巡見中に候。兩三日前地理上有名なるジャイヤンコーズウェー(巨人庭石)の奇勝を探り申候。

題 巨 人 庭 石

天石鍊磨造奇形。絶妙使吾疑有靈。西俗所傳君勿笑。古來呼稱古人庭。

時 事 所 感

講堂一夜爲風積。再築功成復化灰。遺恨禍源猶未盡。天災漸去又人災。

三 月 廿 三 日

井 上 圓 了

# 宗教的自覺と社會の改善

和田鼎

嗚呼羅馬共和政治の腐敗するに當り、嘗て敬虔廉直の情と淳朴豪壯の氣風と更に世界統一の大理想とを以て、優に當代の勲業を成熟したる羅馬人は、彼等が尙夢想だもせざりし海外諸文明國征服の結果として、凱旋門頭多大なる戦利品によりて市民の眼を眩せしめたと共に、また最も畏るべき奢侈の惡風を輸入し來り嚮日單褐弊衣の木強漢は一轉して錦衣玉冠の貴公子となり、奢侈は曳て財政の困難を來し、財政の困難は其必然の結果として黄金萬能の弊風を伴ひ來るに及び、上下の人心滔々として拜金の熱に浮され、廉潔の美風は全く地を掃ひ、敬虔眞面目の氣風轉々消沈して賄賂公行し、遂にヌミチアの篡奪者シゲルタをして「汝醜惡なる市民よ、汝は黄金の爲めには汝の市を賣るをも辭せざるべし」と叫はしむるに至り。かくて社會の腐敗墮落は其極に達し、國民趣味の低下風俗の淫靡は遂に救ふべからざるに到れり。偶々キケロの如き廉潔の士あり、慷慨悲憤舌頭を爛らして警告を與へたるも、滔々たる濁流の趨勢は遂に得て挽回するに由なかりき。吾人西史を繙きてこゝに到る毎に之を現代に於ける吾國民の

状態に照し、轉た浩歎の念に堪えざるものあり。腐敗したる羅馬には收賄の公行を見たり、現代の日本は果して如何。墮落したる羅馬には投票の賣買を見たり、現時の日本は果して如何。奢れる羅馬には黄金崇拜の弊風が人心を靡痺せるを見たり、下民重欲に堪えずして流離四散するの間、門閥獨り豪華の夢に酔へるを見たり、淫靡なる文學と卑猥なる音樂と野卑なる美術とを見たり。東洋の君子國所謂世界の日本は今果して如何。吾人は今之か説明を與ふるのあまりに明白に過ぐるあるを知る。羅馬の腐敗は單に過去に於ける事實たるに止まらずして、現世の日本今正にこの寒心すべき羅馬の二の舞を演じつゝあるに非ずや。

然れども今の時吾人は管徒らに慷慨悲憤して止むべきの時非ず、日本は如何に腐敗せりと雖とも、天下豈に一人の吾人と志を同ふして、眞面目に將來の日本を憂ふるの士なきに非ざらんや。然れどもキケロの熱誠と雄辯とを以てして尙且羅馬市民の墮落を救ふこと能はざりしは何ぞや、彼は管慷慨するのみにして未だるか救済の策を立てざりしが爲のみ。是を以て身を門閥より起し献身の誠を盡して下民の爲めに戦ひ、條理ある社會改善の策を講じ、若々其功を收めんとして遂に門閥の毒刃に斃れたるグラカス兄弟の如き、よし身は志望半ばにして主義の爲めに殉じたりと雖ども、其下民に與へたる社會改善の德澤は洵に鮮少なからざりしなり。論の高くし

て空ならんより寧ろ議卑くして實ならんを求めざる可らず。キケロの論議は洵に堂々として問然するところなかりき。然もそは空論なりき、空論は當時の如き腐敗したる羅馬には何等の實功をも奏せざりき、グラカスの論は早くして實着なりき、而してそは下民の窮狀を救済するに於て確かなる働きを有したりしなり。如何にあるかの問題は既に去れり、今は之を如何にすべきかの問題を講すべきの狀ならずや。

吾人の見るところにして誤なからしめば、羅馬の腐敗が諸種の外的方法によりて救はれざりしは固より其所なり。何ぞや、彼等は未だ希臘か有したりし如き聖哲ソクラテースを有せざりき、而して彼等の宗教は尙幼稚なる多神教の時代なりき。若し彼等をして一聖哲の感化に浴せしめば、若し彼等をして社會の根柢より敗腐墮落と救済すべき眞宗教の活福音を聞く事を得せしめば、或は彼が如く甚しきを致さずして早く光明を認むることを得たりしならん。生命なき百千の社會主義幾百の社會改良運動の如きは管僅かに其外皮の剝撃たるに止まり、社會の根柢より腐敗を一掃し去るが如き偉大なる活力を有するものに非ず。誠心誠意下民の窮狀を救はんか爲めに身を犠牲に供したるグラカス兄弟の血を以てして、尙充分に其效を奏せざりしは、職としてこの内的宗教的信仰の活力によりて、人心の奥底社會の根柢より宗教的自覺を喚起し來り改善の道を講せざりしに是よるのみ。頑迷なる門閥を

教えて内心より深く自家の非を自覺せしめざりしが爲めならずや、グラカス兄弟の如き彼は後世の社會主義者か多く世に容れられざる不平黨の社會階級の下位に屬するものより起るに反し、身を名門閥族中より起し自家の資産とその生命とを擲ちて事に従ひしを見るも、少くとも現代に於ける社會主義者か今後貴族社會の名望家より出でざる限り、其實效を收めんこと洵に遼遠の感なきを得ず。この點に關して吾人はレオトルストイ伯を有する露國農民を幸福なりとするに躊躇せざるなり。彼れトルストイ伯は今や其燃ゆるか如き信仰に基き、天國をこの世界の上に實現するを目的とする愛の教を喧傳しつゝあるなり、如斯にして初めて社會主義の上に重きを致すべし。單に勞働者を物質的に救はんとする今の社會主義者は猛省するところなくんばならず。故に吾人はいはんと欲す、眞誠なる社會の改善は宗教的自覺の喚起を要とすること。嗚呼憐むべき黄金崇拜の羅馬が腐敗の容易に救はれざりしは、一に彼か眞正なる宗教を有せざりしに坐するに非ずや。

更に他方面より少しく論ずるところあらしめよ、人文發展の史上に於ける宗教の位置が如何に其至要なる部分を占むるかは、少しく眼を史籍に照らしたるもの、等しく皆首肯するところならん。人世の花とも稱すべき文學、美術、音樂の如きは畢竟是れ人心の最奥にひそめる宗教心の形を變したる彩

紋に外ならず。何れの文學と美術と音楽と宗教と離れて存立し得べき、上代よりしやの雄渾なる美術文學は神活の信仰より湧出したるものに非ずや。優美崇麗なる奈良朝の美術、文學はまたこれ佛教の信仰より發芽したる美花に非ずや。また十三世紀に於けるダンテの神劇ミハエルアンジェロ、ラファエルの美術は、基督教の信仰によりて孕出したるところならずや。總じて是等人生の最も崇高なる安慰は、何れも皆宗教的信仰の勃興に俱へるものにして、信仰の熱度最も旺盛を極むるときに到りて、美術文學音楽の三者もまた其極致に達するを見るなり。即ち人心の宗教的自覺はこゝに大文學、大美術、大音楽を生し出すべきもの、今の日本に野卑なる男女の戀愛を説く文學(?)と、年々歳々毫も異るところなき、花鳥山水の平凡畫の外、一も見るに足るべきの大文學、大美術なき所以のもの、又職として是等の根柢となるべき宗教的自覺の缺乏に因せずんばならず。徒らに大文學の出でざるを怪しむ事勿れ、去て先づ自己の研究を爲せ、大美術のあらはれざるを歎ずることを爲さざれば、往てまづ過去の名匠か苦心の跡を尋ねよ。思ふに國民趣味の低下したること今の時より甚しきはなけん。所謂紳士紳商なるもの、其常に如何に身もちずるかを見よ、その趣味の低下なる真に嘔吐を催すべきに非ずや、社會改善の一策として吾人はこの趣味の低下を救ひ、その卑劣なる娛樂に耽るものをして、美術文學音楽の如き正し

き娛樂を喜ばしむるに力めんことを計らざるを得ず。畢竟彼等の耳は木靴の如くして崇高なる音を解せざるが故に、走て低聲をよるこぶのみ、彼等の眼は十呂盤球の上下するを見るのみにして、未だ高尚なる美術を解せざるが故に、走て花柳の色に荒むのみ。之を例へば幼童の喜んで駄菓子を食べふが如く、未だ上菓子の味を知らざるものに向て、香りの駄菓子をすてよと勸むるも其甲斐なきが如し。その駄菓子を棄てしめんとせば、上菓子を示して味はしむるに加かず、今の社會改良家の多くが爲すところは幼童をして駄菓子を棄てしめんと力るのみにして、未だ進んで積極の方法により上菓子を示さんとせざるが如し、趣味の低下と娛樂の高尚に就て之か改善を計るは洵に目下の急務に屬す。而してかくの如く趣味の低下と娛樂の劣劣を生じたる主因に至りては、吾人は又之を以て現代に於ける崇高なる眞率なる宗教的自覺の缺損に歸せざる能はず、この點より見るも宗教的自覺の必要たるや論なきところ。

眞正なる宗教を有せざりし共和時代の羅馬は後帝政の時に及び基督教の傳來によりて初めて救はれたり、かくて大文學、大美術生れ、國民の趣味は崇高となれり。腐敗墮落の狀當年の羅馬に酷似せる大日本(?)は、佛教の復興によりて其宗教的自覺を喚起するによりてのみ救はれんのみ。かくて大美術は出でん、大文學は生ぜん、趣味の劣劣なる、風俗の淫靡なる、又從て之を濟ふことを得んか。預々たる外的運動を以て社會を改善せんとするもの、如きは、洵に思はざるの甚しきものと云ふべし。感あり之を記す。



温知

龍樹菩薩烏陀那王  
に與ふる書

松本文三郎

叙論

余今不肖を顧みず、敢て妄りに龍樹の書簡を譯述す。此書固と國王を訓誡し之をして正道に就かしめんか爲めに作れるもの、乃ち佛教の大要道徳亦實に此に備はる。書中地獄の説に細かたる如きは、亦唯是れ老婆心切、王をして善に就くと一日も怠ならしめ、苟くも悪業を爲さざらしむるの意に外ならざるなり。佛教に志あるもの、若しくは佛教史を研鑽せんとするものにおいて、此書豈に又多少の興味なしとせんや、片々たる一簡牘、亦仔細に之を翫味し來らば、佛教思想の變遷、思ひ半はに過ぐるものありを發見せん。

此書元と題するにシエ。ヘエ。リン。イグ (Bas-pai-phr-  
ing) 梵語スアリレクハ親友書(義)の語を以てす、蓋し是れ

龍樹が厚意を以て烏陀那王に與へ、之を訓誡したるの書なり。

此書梵本其の傳を失ひ、今之を求むるに由なし、西藏藏經之を收む、是れ此譯の本つくとくにして、卷末記すか如く印度僧サルツァチユニヤ・デアツァ(一切智天)及び西藏沙彌バル・ツェツグ(Dpal-ltseggs吉祥慈)第九世紀に於て之を譯せり。別に又ロ・デ・チエン・ポ(Blo-gros-chen-po梵トハーマチ大慈)撰するところ註釋一卷あり、(共にタンヂェル經部第九十四卷)漢譯藏經亦之を容る、此に三譯あり、一は之を龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈と題し、二は之を觀發諸王要偈と名づく、共に是れ西曆紀元後四百三十一年グナツアルマン(求那跋摩、漢譯功德鏡)の譯するところに係る。(南條博士の三藏聖經目錄には、第二譯を以てサムグハツアルマン(僧迦跋摩漢譯衆鏡)の譯となす、恐らくは誤ならん。其の後義淨法師(七百年より七百十二年の間)更らに之を改譯し、題するに龍樹菩薩勸誡王頌の名を以てせり、而して其の卷首記して曰く、此頌は是れ龍樹菩薩、詩を以て書に代へ、南印度の親友、乘土國王に寄與するの一首たりと。又曰く龍樹菩薩、詩を以て書に代へ、蘇頌里離法(スワリレチハ)となす、譯して密友書となす、舊の擅越南方の大國王、號は婆多婆漢那(サドヴァーハナ)名は市演得迦(禪陀迦同しツニヤイタカ)に寄せ與ふるなり。謂つへし、文藻秀發して懇誨勤々たりと。

的に中途を指して、親骨肉に違ふ、就中の旨趣寔に多意あり、五天創學の流、皆此書讀を誦す、歸心繫仰の類、研味身を終らすといふことなし、神州の法侶觀音の遺教を誦し、俗徒千文孝經を讀むか如し、欽玩して用て師範とせざるなしと。(南海寄歸傳卷四五、一六、)

求那跋摩か何故に、同一書を採りて之を二重に翻譯せしか、今之を明かにするを得ず。或は彼前後兩書を以て龍樹の別著となせしにはあらざるなきか、何となれば一は之を爲禪陀迦王說法要偈と名づけ、他は之を勸誡諸王要偈と題すればなり。既に龍樹か禪陀迦王の爲めに説けるところたるを知らは、特に之に題するに諸王の字を以てするは怪しむべきの事に屬す。然りとはいへとも彼兩書の共に龍樹の手に成り、而して其の内容の言々句々同一なるを見は、之を以て別著となす、亦甚た以なきに似たり。或は求那跋摩始め第一譯を終り、而る後更らに之を改譯し、禪陀迦に説けるところは、均しく一切王者の誠となすに足るあるを以ての故に、之を改題したるにはあらざるなきか。

此書梵本何れの時よりして其の傳を失へりしや、今得て之を知るへからすといへとも、西藏譯の第九世紀に成れりしを以て之を見れば、紀元後千年代尙ほ印度に遺存せしものたるは疑を容れず。特に義淨の印度を周遊して、南海諸州に至れるや、(義淨は紀元後六百七十一年支那を去りて六百九十五年本

土に還歸せり)創學の輩皆之を記誦して怠らすといへるを以て之を見れば、此書の當時盛に世に行はれたりしや知るべきなり。蓋し思ふに龍樹の意、唯以て王を訓誡するにあり、乃ち其の言洵に卑近、解し易くして行ひ難からず、而も佛教の大旨茲に盡きたるを以ての故に、斯の如く一代に盛なるを致せしものか。

書中記するところ多岐に分るといへとも、義淨亦善く其の要を約して次の如くにいへり、曰く此書先づ三尊を敬信して父母に供養せしめ、戒を持し惡を捨て、人を擇ひて乃ち交る、諸財色に於て不淨觀を修し、家室を檢校して、正しく無常を念す、廣く餓鬼旁生を述べ、盛に人天地獄を道ふ、火頭上に燃へて拂除するに暇なきも、緣起の運心、専ら解脱を求め、勸めて三慧を行して、聖道の八支を明らかにし、四眞を學はしめ、圓證の兩行を證す、觀自在の如く怨親を簡はすして、阿彌陀によりて恒に淨土に居り、斯れ即ち化生の術要、以て加ふるなしと。(南海寄歸傳卷四ノ六)

龍樹の事蹟は藏經中之を記すもの尠からず、余亦別に其の考あり、異日公にせんと欲す、乃ち今復贅せず。烏陀那王に至りては、人多く之を知らず、而して諸說正鵠を得るもの稀なり、今左に少しく之を述ふへし。

印度史上烏陀那の名に乏しからず、而して王の異名亦二

三にして足らざるなり、是故に古來の學者往々にして同名異人を同一視し、若しくは異名同人を異人視す、マキス、ミュラー氏の如きも、漢譯サドヴァーハナの音字娑多訶に對し、諸種の字を充て試みたりといへとも、遂に其の要を得ず。ウエッセル氏の譯を得、其ウダヤナと書するを見、乃ち以て西藏譯の漢譯に勝れる一證となせり。(千八百八十三年出版巴利聖典協會雜誌參照)烏んそ知らん、娑多婆何若しくは娑多訶とは、是れ烏陀那王の異名に過ぎざることを。

西藏語ウダヤナを譯して通常テ、チエ (Bde-kyod) の字を以てす、而も又時ありてはテ、チエ (Bde-kyed) の字を用ひ、又稀には音譯してウトラヤナとなす。シーフナーは乃ち疑ひて以爲らくテ、チエは是れテ、チエの誤ならんと(ターラナートハ印度佛教史七二頁註二)然りとはいへともウエッセル氏は曰く是を以て誤となすべからず、唯烏陀那に對する舊譯なるのみと。(千八百八十六年出版巴利聖典協會雜誌)蓋シテ (Bde)とは福、善、慈の義、チエ (snyod)とは爲し、行ふの義、而してチエ (kyed)亦爲し成すと意義す、乃ち兩者の同一義たり。以て之を知るべきなり。是れ梵語ウダヤナに對するの語、而して亦實に梵語サドヴァーハナの意義をも顯はし得るの語なり。梵語サドは通常之を正、妙、善と譯し、ヴァーハナは語源ヴァフより來り、引き、持參し、運ぶの義と同時に有し、得、等の意義をも有す。玄奘の引正を譯せしは、即ち前者

の意義を探れるもの、若し又第二義に従はば、ウダヤナの義と又殆んど相異なるなきなり。是に於て乎ウエッセル氏は實に此兩名を以て、斷して同一人の事となせり。(同雜誌四一五頁)

漢譯經典にはウダヤナの字に填つるに、烏陀那の字を以てし、或は優填の字を以てす。後者は唯之を畧稱したるに過ぎず、而して出愛王を以て之を譯せり。サドヴァーハナは娑多訶若しくは娑多婆何の字を以て之に充て、引正若しくは引善の語を以て之を譯せり。

佛在世の時亦烏陀那王あり、同じく佛に歸依し、佛像を作れりと稱せらる。或は問ふ是れカウシャームビー(俱賞彌)の人と、或は曰ふ是れヴァーラーナシー(波刺那斯)の人と、(西域記卷五ノ十六丁、ケルン佛教史二卷二百頁、シーフナー佛傳二三五頁、二七三頁、ターラナートハ佛教七二頁等、參照)是れ固より此に所謂烏陀那王と同名異人たり。

ヴァンソエフ氏は又西藏の經典によりて曰く、此に所謂烏陀那王は尙ほアンテヴァアハナと稱し、其の幼にして始めて龍樹に會見せし時はチエタカと稱せりきと。(ターラナートハ佛教史補充三〇三頁)乃ち知るへし王名一にあらざりしことを。

烏陀那と娑多訶とは固と是れ異名全人たるは、如上の説によりて已に之を明らかにするを得たり。唯吾人の奇とす

へきは、西藏烏陀那の名を傳へて婆多訶を知らず、支那婆多訶を知りて烏陀那を傳へざりしこと是れなり、而して是れ實に後世學者をして誤解を招がしむるの禍源を成せり。

龍樹の友たりし烏陀那王は、實に南天竺僑薩羅の主たりしなり、ターラナトとは唯其の南天竺の主たることを説けりといへども、其の何れの國王たるやを述べず（佛教史七〇、七四頁、馬鳴菩薩傳並に付法藏因緣傳卷五ノ十八、十九丁）而も西域記は之を證して餘りあり、同く此國（僑薩羅）の王を婆多訶と號す、龍猛を珍敬して門徒を周衛せりと（西域記十卷十二丁）蓋し龍樹は得道の後、摩揭陀國ナーラング（施無厭）寺に住し、後南印度を遊化せしもの、如し、是故にターラナトハは曰く、龍樹大士は久しく施無厭寺に住し、五百の大乗學徒を薰陶し、其晩年去りて南方に遊び、烏陀那王を化し、多年大教を扶植せりと。（佛教史七〇、七二頁）僑薩羅とは今の所謂ベラル、又ゴンドツアーナにして、（カンニングハム印度古代地誌五一九、五二〇頁）中南兩印の境に位するの地たり。

ウエンツエル氏は古來の學者か往々にして佛在世の時に於ける烏陀那王と龍樹の友たりし烏陀那王とを混全するを排し、前者を以て俱賞彌の王となし、後者を以て波刺那斯の主とせり。然れとも余を以て之を見るに是れ亦非なり、此説秋毫の典據なし。蓋し佛存在の時に於ける烏陀那に關して

は、兩説相分るといへとも、龍樹の友たる烏王に至りては、何等の書も未だ波刺那斯の主たることを記さず。加之、是れ明かに西域記の文に反せり。波刺那斯とは今の所謂ベナーレスにして恒河の右岸に位し、アルラーバードを距ること遠からざるの地なり。（カンニングハム古代地誌四三五頁參照）若し龍樹が始め施無厭寺に住し、而る後南方に去り、此に烏王に會すとせば、烏王の波刺那斯國主たらざるや斷して明らかなり。思ふにウエンツエル氏は、佛在世の時に於ける烏王の領土に兩説あるを見、之を兩王に配したるものにあらざるなきか、余輩は此に疑なき能はざるなり、マキス、ミユラー氏か何等研究するところなく、之に盲從したる亦實に笑ふに堪えたり。

烏陀那王の始めて龍樹を見しは、實に其の幼時にありしか如し、ウアンリエフ氏は西藏の典籍によりて左の如くに曰へり、龍樹が北俱盧州（ウツタラクル、ドツキバ）に行かんとせし時、一幼童を見、其の遂に王たらんことを豫言より、龍樹の歸り來りて十二年の後、其の事果して然り、而して是れ實に烏陀那王たりと。（ターラナトハ佛教史補充三〇三頁）王が果して何年に即位せしや、今之を明かにするに由なしといへとも、少くとも其の即位の前、既に之を知れるものたるや、秋毫、疑を容れず。且つ龍樹が王に説くに「婦女若し宿敵と伴たらば、復讐神の如く、家主を蔑せは、陀羅の如

く、假令以極微も之を窺はば、盜の如くに相似たり、爾之と配すること莫れ」（頌三十六）の言を以てす。印度當時王者の俗、早婚にして多妻を常とす、乃ち之を以て王の未だ婚せざることを斷する能はずとするも、亦未だ其の大に老せざりしを知るべきなり。ターラナトハは其の佛教史に於て又次の小話を載せり、曰く烏陀那王の幼妃少しく梵語文典を辨す、而して王は未だ會て之を學はず、一日共に樂園清水の邊に遊ぶ。王戯れに水を幼妃に灑ぐ、妃の曰く水を妾に灑ぐこと莫れと。（マモダカーシムチャ）王は唯南方の語を知るのみ、南方の語、此音豆油を以て煮たる豌豆菓子を意義す、王乃ち之を妃に與ふ。妃私かに以爲らく、斯の如き暗主と生を共にせんよりは、寧ろ死するに如かすと、乃ち將さに自殺せんとす、王百方之を止め、漸くにして事なきを得たり。王乃ち是れよりにして婆羅門ヴァラルチ（波羅婁支）を師として語學を研究せり、所謂波羅婁支とは、龍樹の友にして烏陀那王の家僧たり、之を久しくして些少の進境を見ず、是に於て乎又サブタヴァルマン（七鐙）の教を受け、而る後善く佛教の諸典に通せりといふ（ターラナトハ佛教史七三、七四頁、同三〇三頁參照）是れ亦以て王が少時の事たるを知るべし。西域記（十卷十四丁以下）并びにウアンリエフ（ターラナトハ佛教史補充三〇三頁）は曰く、王の稚子、父王が龍樹の教を受け、長壽を保てりしを恨み、（ターラナトハによれば王は百五十歳

の長壽を得たりきといふ、佛教史七三頁）其の母に謂つて曰く、我の如くんば何の時か王位に即くことを得んと、母の以爲らく、龍樹寂滅せば王亦徂落せん、汝試みに彼に往きて以て其の頭を乞ふべし、若し其の志を遂げば所願を果すべしと。是れに由りて之を觀れば龍樹の王に師友たりしこと、假令以ターラナトハのいへりしが如く二百歳若しくは百歳（佛教史七三頁）の長年月にあらずとするも、其の數十年の久しきに亘れる、亦之を知るに難しとなさず。

烏陀那王の龍樹を厚遇せしは西域記（八十卷十二丁）に龍猛を珍敬して其の門徒を周衛す、との語によりて之を知るを得べし。王が龍樹の爲めに其の力を盡くせし、亦尋常にあらず。僑薩羅の西南三百餘里、黑峯（ブラーマラギリ）あり、屹然として突起す、奇巖峭嶮、既に崖谷なく、宛も金石の如し、王、龍猛菩薩の爲めに其の山中を鑿ちて伽藍を建立し、山を去ること十數里、孔道を鑿開して、其の山下に當て、仰きては疏石を鑿り、中には則ち長廊步檐、崇台重閣あり、閣には五層ありて、層には四院あり、并びに精舎を建て、各鑄金の像を安置す、量佛身に等しく、妙工思を究む、自餘の莊嚴唯金寶を飾る、山の高峯より臨まは、飛泉注き、重閣を周流して、廊廡に交帶す、疎寮外の穴より明かに中字を燭らすと、其の莊嚴亦以て概見すべきなり。王の始め伽藍を建てんとせしや、人力疲竭して府庫空虚なり、而して功猶ほ未だ半

ならず、心甚た憂感す。龍猛謂ひて曰く、大王何か故を憂負あるか如くなると、王の曰く、輒ち大心を運らして、敢て勝福を建て、之を永固に期して慈氏に至らんことを俟つ、功績未だ成らずして財用已に竭く、毎に此恨を懷きて坐して且らく待つと。龍猛の曰く、憂ふること勿れ、崇福勝善其の利究まらず、弘願を興すことあらば、濟らざるを憂ふると勿れ。今日宮に還りて、當さに歡樂を極むべし、後晨出遊、山野を歴覽し、已にして此に至り營建を平議せんと。王既に誨を受けて奉して以て周旋す。龍猛菩薩神妙の業を以て諸大石に滴し、并びに反して金となす、王遊びて金を見、身口相賀し、怨を廻らし龍猛の處に至りて曰く、今日敗遊するに神鬼に惑はされ、山林の中、時に金の聚るを見る。龍猛の曰く思惑はすにあらざるなり、王誠に感ずるところ、故に此金あり、宜しく時に取用して勝業を濟成すべしと、遂に以て建營す、功畢りて餘りあり、是に於て五層の中、各四大金像を鑄し、餘尚ほ盈積するをば、諸窟藏に充て、千僧を招集して中に居り禮誦せしむ、龍猛菩薩、釋迦佛の宣敎せし法及び諸菩薩の演述せし論を以て、部別を鳩集し、藏して其の中にありと、西域記十卷十四、五丁)

鳥陀愆那王は龍樹の滅後久しからずして世を去れるか如し、西域記(十卷十三、四丁)又次の話を載す。(ターラナートハ佛教史七三頁参照)

龍猛菩薩は善く藥術に閑ふて餌を養ひ、生を養ふ、壽年數百、志貌衰へず、(ターラナートハ)によれば或は曰ふ六百歳に足らざるること七十一年と、或は曰ふ二十九年と、王既に妙藥を得て、壽亦數百、(ターラナートハ)によれば百五十歳)王に稚子あり、(西藏經典には其の名をスシャクチといふ)其の母に謂ひて曰く、我の如き何の時か王位に嗣くことを得んと、母の曰く今を以て之を觀るに未だ期あらざるなり、父王年壽既に數百歳、子孫老ひて終るもの蓋し亦多し、斯れ皆龍猛の福力加ふるところ、藥術の致すところなり、菩薩寂滅せば、王必らず堕落せん、夫れ龍猛菩薩は智慧弘遠、慈悲深厚なり、群有に周給して身命遺れたるか如し、汝宜しく彼に往きて試みに從ひ頭を乞ふべし、若し此志を遂げば、當さに所願を果すべしと、王子恭しく母命を承りて伽藍に來至す、門者驚懼す、故に入ることを得たり、時に龍猛菩薩方々に讚誦經行す、忽ち王子を見、忙然謂ひて曰く、今夕何の夕と、趾を僧房に降すと。(王子)危きか如く、懼るゝが如く、疾驅來至して對て曰く、我が慈母の餘論を承くるに、語捨を行する人に及ぶ、以爲らく生を含み命を空とするは經誦の格言、未だ輕しく報身を捨て、諸の求欲に施すあらずと、我が慈母の曰く、然らず、十方の善逝、三世の如來、在昔發心して證果に逮ひ玉へり、佛道を勤求し、戒忍を修習せんには、或は身を投げて獸に食ひ、或は肌を割きて鶴を救ふ、月光王は婆羅門に頭を施

し、慈力王は餓へたる藥叉に血を飲ましむ、諸の此の如きの類、此に備さに擧げ難し、之を先覺に求むるに何の代か人なからん、今龍猛菩薩斯の高志を篤くすと。(以上母の言)我求むるところあり、人頭を用となす、招募歳を累ぬれども、未だ之を捨つるあらず、暴を行ひて劫殺せんと欲すれば、則ち罪累尤も多し、無辜を虐害せば穢德彰顯せん、惟菩薩聖道を修習して、遠く佛果を期す、慈有識を嚮し、慧無邊に及ぶ、生を輕んずること浮けるが如く、身を賤むこと朽たるが如し、本願に違はざれば、允に求むるところを垂れよと。龍猛の曰く、命に誠なる哉、是言や、我佛の聖果を求め、我佛の能捨を學す、是の身は響の如く、是の身泡の如し、四生に流轉し、六趣に往來す、宿に弘誓を契り、物欲を遣えず、然れども子に一の不可なるものあり、其れ將た若何せん、我が身既に終らば、汝が父亦喪せん。斯を顧みて意となせ、誰か能く之を濟はんと。龍猛徘徊顧視して命を絶せんところを求む、乾きたる茅葉を以て自から其の頸を刎るに、利劍の斷害するが如く、身首處を異にせり。王子見已りて驚き奔り走る、門者上白、具さに始末を陳ぶ、王聞きて哀感し、果して亦命絶すと。

感化事業の目的を貫徹せしめんとならば、我現行刑事制度の幼年犯罪者處遇に關する根本的規定の改正を斷行するの必要あること勿論なりと雖も、差向き先づ事業は費用を伴ふの原則に鑑み豫め十分確乎たる財源を得るの途を講ずるの最も必要なるを信ず、箇人的慈善事業として之に従事する者あるは其美譽たること誠に嘉すべしと雖も、限ある箇人の力其慈恵の及ぶべき範圍にも亦限なきを得ず、況や社會が所謂慈善に對する觀念狀態の實況に付ては我と彼と大に其趣を異にするものあるに於てをや、我國に在りて慈善的施設に斯業の成功を待つあらんと期するが如きは、恰も木に緣りて魚を求めんと欲するに似て尙ほ一層の難事たり、若し夫れ強て慈善的施設を奨励するが如きことありとせんか、一時之が實行を見ること難からざるべしと雖も、到底設備の充實監督の勵行を

### 不良少年の感化事業と論ず (下)



小河 滋次郎

期する能はざるのみならず、忽ちにして又財源の涸渇役員の破綻等を餘義なくし、終に雲霧消滅の運命に到るべきは必然なり、縦し又假に雲霧消滅の運命を見るに至るが如きことなしとするも、資本缺乏の結果として其施設の常に放漫粗雑なるを免れざるは當然と謂ふべく、設備の不完全なる下に不良少年殊に多数の不良少年を收容するの危険は、寧ろ初より全く之を收容せざるの安全なるに如かず、彼の往々にして箇人的慈善事業に従事すと稱する所の者か、殆ど乞食類似の方法に依り頭是なき幼年の涕を利用して以て慈善密附を哀請するに至るか如きものあるは何ぞ、一意唯資本の缺乏を補はんと欲するか爲めたるに外ならず、其心事や固より深く諒察すべしと雖も、其將來に貽すべき禍根の大なるや亦頗る寒心に耐へざるなり、我當局者か斯業を以て之を慈善的一箇人の施設に放任し、少くも信頼せんと欲するの考案若くは方針を有するの間は、斷じて終に感化法制定の精神を其一小部分に貫徹し得るの時機なかるべきを信す、感化法に所謂代用感化院の規定の如きは萬々已むを得ざる場合の外は決して之を適用せざらしむるの決心なくんばあるへからず、卑見に依れば所謂代用感化院の規定は、歐洲各國に於ける家族交付の場合に之を適用するを可とす、故に各地方に於ては少くも一箇以上の公設感化院を創立すること勿論にして、尙ほ此餘に於て相當の私設物を代用感化院として指定し置くことを要す、

公設院は電燈の如く私設院は「ランプ」の如し、電燈を用ふるか爲めに「ランプ」を全廢する能はざるか如く、代用感化院亦時に補充の必要ある場合に於て之を利用すへし、但し其初より電燈を捨て、「ランプ」のみを取らんと欲する者の如きは、抑も文明の利器を利用する能力なき愚者の事と謂ふへし。感化事業に要するの費用は、第一兩親又は扶養義務者をして之が負擔に分任せしむべきは當然なり、何となれば彼は其兒童か教育の一種たる感化教育の下に強制せられたるか爲めに當然支出すべき教養費の負擔を免るゝの理なく、殊に其當然盡すべき教養義務の弛怠に因り終に彼れの兒童をして感化教育に強制するの已む能はざるに至らしめしを以てなり、且つ社會政策の上より之を言ふも徒に貧民をして其負擔(當然盡すべき)を輕からしむるの途を開くは、却て彼れの依頼意慢の惡風を助長するものにして決して策の得たるものに非ず、況やさなきに貧民の常態として兒童教養の何たるを解せざる者滔々皆是なるか故に、若し彼をして其教養を忘るの結果却て一面己の煩累を免れ、一面公費を以て完全なる教養の下に其兒童の幸運を豫期すへしとの觀念を起さしむるか如きことありとせば、實に測るへからざる大害を波及せしむるに至るべきに於てをや、是を以て英國の如きは兩親又は扶養義務者に對し、費用追徴法を勵行すること極めて嚴密にして、特に之が爲めに若干の調査委員を設定し置き、必要に應

し時々臨檢調査を遂げ幾分にも實際負擔に堪へ得らるゝ限り、凡ての方法を以て之を徵收せしむることを努む、故に實際上亦定額を收むる能はざる者は多々之ありと雖も、全く負擔を免れ得るか如き者は殆ど絶無なりと云ふ、獨逸の如きも亦大に此點に注意する所あり、之に反して我感化法施行細則の粗漏散漫一讀人をして其不用意の甚しきに驚かしめすんばあらず。

感化事業と最も直接の利害的關係を有するものは地方團體是なり、故に地方團體をして卒先斯業經營の局に當らしむることは、各國皆其軌を一にする所にして、隨て必要經費の負擔に任せしむべきは當然なり、我感化法規定の精神も亦此に在り、唯其本法施行の取捨權を是擧げて之を地方議會に一任したるか如き、立法意思の薄弱も亦極まれりと謂ふべく、斯業の前途尙ほ頗る遼遠たるを免れざるは識者を俟ちて後に之を知らざるなり。

國家は感化事業に對して果して全く無關係の地位に超然たるを得べきや、將た又感化事業は國家の勸奨、助力を俟たずして獨立以て能く其成功を期すべきや否、若も斯業の性質範圍其他各般の關係を詳にする所の者は、此問題に對し國家も亦道理上及び必要上大に其力を斯業に盡すの責任ありと斷言するに躊躇せざるへし、英國の如き最も共濟慈善の思想に富み且つ自治觀念の最も旺に發達したる國柄に於てすらも、國

家か斯業に對して有形無形の助力を與ふること彼の如し、況や彼と大に其國情を異にし、何事も國家萬能力の助勢を藉るに非されは容易に成功を見る能はざるの我國に於てをや、殊に感化と稱するか如き不生産的耳新しき事業に對し、容易に社會の同情を惹き起さしむるに至らんこと困難なりと謂ふべく、幸にして僅に其創始を見るに至るも、一頓挫あれば則ち忽ち反抗非難の聲裡に其運命を埋没せしめらるゝに至るを免れざるは明かなり。實權は金力に在り、金力に伴はざる監督は監督の名ありて其效なく、金力を以てせざる保護は保護の名ありて其實なし、國家は唯一片の法律を制定するに止まり、之に伴ふ必要の經費に付ては些少の補助額に支出することなきにも拘らず、尙ほ漫然として感化事業は目下焦眉の急務に屬す、政府は斯業の一日も早く普及實行せらるるに至らんことを望むと稱す、其望や空望なりと謂ふへし、若し夫れ眞面目に斯業普及の一日も速ならんことを望まば、直しく國庫より必要經費の補助を與へ以て感化事業費の財源を確乎たらしむるの途を講すべし、感化事業は犯罪豫防に對する最も直接にして且つ最も有效なる手段たり、故に之が普及を計るの結果は一般犯罪者の減少と爲りて、間接には國家民人の安寧を維持し、直接には又監獄經費の節約と爲りて國庫の負擔を輕減すへし、感化事業は一種の監獄改良事業なり、監獄改良に必要な經費は國庫の負擔たるを免れ能はざるか如く、

感化事業に對しても相當の責任を盡さざるべからず、況や當に國庫の負擔に堪へざる程の多額の支出を要せざるのみならず、其支出する所のものは數年を出てずして、監獄費の減額に依りて之を償ひて尙ほ餘りあるを見るべきに於てをや、如上の理由を以て議會に臨まば議會は必ず政府提出豫算を協賛するに躊躇せざるべしと信ず。

感化施行の方法には通例感化院交付及び親族交付（我感化法には親族交付に關する明文の規定なし、實際亦國情相違の關係より純然たる親族交付の方法をば我國に適用すること困難なりと信ず、假に姑く所謂代用感化院なるものを以て之を彼れの所謂親族交付と看做すも可ならんか）の二種類ありて其利害を論ずる者各々區別見解を異にする所ありと雖も、要するに感化教育は普通貧民教育等と其趣を異にし、救済及び教育の趣旨を包含せしむると共に併せて又矯正感化の目的を貫徹せしむる所なくんばあるべからず、普通貧民救済事業に在りては努めて經費の節約を計ること救済の趣旨に適する最緊要務なりと雖も、感化事業に於ては則ち然るを得ず、矯正感化の目的を達するに必要なる設備は如何にしても之を全うするの覺悟なからざるべからざるの結果、勞ひ偏に唯經費の節減のみを計る能はざること猶ほ監獄を以て普通貧民院又は一般製造所等と同一視し能はざるか如き事情あると同じ、親族交付は經費節約上に於て利益あるべし、利益は則ち施設の

不完全を意味するものにして、孤兒、棄兒其他年齢の最も幼弱なるか、或は感化院に於て矯正の見込ありと認めたる不良少年又は一般の不良少女等は格別なりと雖も、一般の不良少年を擧げて之を家族感化に付するか如きは經費節約と云ふ一點を以ても亦其不可なるを斷定すべきなり、善良の規律は不良少年に對する矯正感化の要素なり、然るに普通家族又は小規模なる代用感化院等に在りては到底適實なる規律の履行を期すべからざること、多年歐米各國に於て經驗せし所に就て之を觀るも亦明かなり、余か感化事業に對する意見に依れば唯り家族交付又は代用感化院（補助として適當の場合に之を併せ利用することは格別なり）制度を否認して公設感化院の必要を主張するのみならず、尙ほ進みて全國中少くも四五箇所を國立感化院を創設し恰も英國に於て工業院と矯正院とを別つか如く、一般幼年の犯罪者にして刑法不論罪の處分を受けたる、殊に十二歳以上の者の如きは（余は此點に付き大に現行刑法の規定を改正して成るべく幼年犯罪者を監獄に拘禁するの範圍を縮小に至らしめんことを望む）努めて之を國立感化院に收容するの方針を取るの必要あるを信ず、但し國立と公立たるに論なく濫に其規模を大にして多數の不良少年を收容し、又は院務當局者の行動を制肘し或は屢々之を更迭せしむるの非なるは勿論にして、公立感化院組織を非とする所の者多くは則ち是を以て公立に伴ふ必然の弊害なりと認むる

もの、如し、故に此點に付ては宜しく慎重の注意を加ふる所あるを要す、終に臨み感化事業に於ける所謂家族主義、軍隊主義又は學校主義等の利害に對し、余の卑見のある所を開陳せんと欲すれども是は姑く他日に譲る。 (完)

### 國民教育普及運動

池山 榮吉

●社會問題は、或る程度までは教育問題である教育が社會に行渡る範圍が廣ければ廣い程、又其の程度が高ければ高い程、從て民衆の生業上の能力は益々増進する譯で、民衆の生業上の能力が増進すればする程、其の生活上の基礎も、亦從て愈々鞏固となるは自然の勢である。夫の自由派經濟學説が、教育問題を以て、社會問題を解決する唯一の鍵鑰と看做せるが如きは、固より偏見たるを免れないが、國民教育の普及を以て、社會問題をして愈々紛糾ならしむるものとせる議論の如きは、誤謬も亦甚しと言はざるを得ない。教育の普及は社會問題をして愈々紛糾ならしむるものではなくて、却て其の要訣を容易ならしむる効を有するものである。

●今日文明國と目ざるる諸國には、大抵義務教育の規定があつて、兒童は必ず一定の年限間、初等教育を授くべきとなつて居るが、それでも實際は其の規定が比較的よく履行さ

れて居るところでも、百人の中數人の無筆者を出すを免れない。而して我國の如き、義務教育の年限が短くて、剩りに六つかしい文字を使用するところでは、縱へ所定の義務教育を滞なく終へたところで、それだけではまだ、手紙一つ口かけないといふのは、敢て怪むに足らないことである。然るに社會の大多數の人民、所謂下層社會、四級團、即勞働者、職人、其他之に對當する階級に屬する者は、大抵皆義務教育を果すや否や、それ各自の撰む所の生業に専注して、また他を顧みるに遑なく、縱し多少の進歩はあつても、尙ほ進んで自己の教育のことに注意しやうと迄は思はず、或は然う思つても、何か他の事情に制せられて、其目的を果すことが出来ないといふ様を譯で、全く教育界外の人となつて了るのである。

◎さてこの社會の大多數の人民、僅かに義務教育だけを濟ました人々の日常生活はといふと、彼等の多くは、一旦學校を去つてからといふものは、また一巻の書をも手にすることには殆んどないので、稀にあれば例の戀愛小説、刑事小説の類に止まる、新聞などを購讀するものも、比較的極少數の者に限られて居る、それさへ好んで讀むところは、例の惡徳新聞の三面記事で、此の如き讀物の内容は、概ね、或は猥褻的、或は殺伐的、或は詐欺的といつた様な、種々不正な感情を刺戟する資料には富んで居るが、智識を進め品性を高める様な、教育

的滋養分には極乏し。是等は寧ろ讀まぬ方が却てよい位のものである。學術的研究が、日新の勢を以て進歩しつつある今日、社會大多數の人民の精神的食糧が、常に饑饉の状態にあるといふことは、何うしても社會の健全なる徴候とは請取れないのである。

◎社會大多數の人民が小學に於て享受したる初等教育に本いて、更に其の知能の發達を計ることの、頗有益なるは言を待たずして明かなことであるが、悲い哉、下層社會に在つては、中以上の社會の如く、自から其の知能の發達を企圖し得べき機會と手段とが欠けて居る。彼等の小學で修めたところは、兒童の思考力に相應する材料に限られて居て、實際社會の生活に處するに當つては、尙ほ知るを要し、若くは少なくとも知るを便とする事柄が澤山あるが、是等の事柄を十分に教授するは、到底小學の能くする所でないで、中には非常の奮發で、無理に獨學してなりとも、自分の知能を研かふとする、感心な心掛けの者もないではないが、彼等の力で解し得べき良本が鮮い爲めに、前に述べたるが如き有害無益の讀書に耽り、其結果は、徒らに身神を過勞するのみといふ悲むべき運命に終るもの、多いのは、誠に残念な次第である。

◎斯くの如く民衆教育の發展を計るは、如何にも必要且有益のことに相違ないが、人民自身の力では、到底其の目的を達するに及ばずとすれば、之を達せんには、是非他に其

の人民の需用に應ずべき教育資料を知悉し、其普及を奨励し、指導する所の力がなければならぬ。是即、國民教育普及運動の必要なる所以で、今日歐米諸國に於て見る所の、所謂「國民教育協會」なるものは、全く此の必要から起つたものである。以下該會の性質及び行動の梗概を紹介しやう。

◎所謂「國民教育協會」とは、大多數の人民、殊に下層社會の教育の發展を目的とする諸種の會を總稱するので、茲に謂ふ國民とは、高等の教育を受けざる人民といふ義である。抑も該會の趣旨たる、敢て國家及び地方團體と教育事業の上に於て競争を試みんとするではなく、只國家及び地方團體の手の廻らない所を補て行かふといふのであるから、小學に於ける義務教育の制ある邦國、又は補習學校の制（任意的なると強制的なるとを問はず）ある邦國に在ては、該會の行動を主として青年及び大人に對するものとなり、兒童に對しては、或は幼稚園、或は兒童保安所（學校を終へて帰宅するも、両親が勞働に出て居て留守であるといふ様な兒童を、午後一定の時間だけ引受けて世話する所）等を設置するに止まり、國家及び地方團體の教育事業に多少の補助をするに過ぎない。

◎「國民教育協會」の行動は、之を鼓吹的と實施的との二方面に分けることが出来る。鼓吹的行動は、主として國家及び地方團體に向て行はれるので、要するに教育上の新問題を提起し來りて、其の實行を國家に迫り、國家及び地方團體の教育

上の行動範圍を、増減變更せんとするのである。協會は之が爲め、或は新聞に、雜誌に、集會に、演説に、將た請願に、國民教育制に關する欠點を指摘して輿論を喚起し、以て其の改善を期するのである。斯くの如くして協會が、終に其主張を貫徹したる例は甚だ尠からず、小學に於ける手工藝及び家政科目の採用、學校衛生の改善、補習學校、國民圖書館、公衆閱覽所（新聞雜誌類の）の設備、其他諸種の事項の遂行に關しては、協會の鼓吹的行動の力が與つて多きに居るといふことである。併し協會の鼓吹的行動は、獨り國家及び地方團體に對するのみならず、屢々他の諸種の團體に對して行はれ、尙ほ著述家及び書肆に對しても亦行はれることがある。例へば各種の學科を通俗的に明瞭に解り易く説明して、而も安價なる書籍の出版を勸奨して、場合に依ては發行部數の一分を協會が引受ける様なことがある。

◎團體の組織如何は其の團體の行動の効力に多大の影響を及ぼすものである。「國民教育協會」の多くは、一の本部を中心として、府縣には府縣の協會、郡には郡の協會、市町村には市町村の協會があるといふ工合に、全國若くは其の一部を通して、一の系統的團結を形成して居るのみならず、或る協會の如きは、諸種の團體、殊に地方團體の機關を協會中に入らしめ、せしむるを努め、以て益々自家の立脚地を鞏固にし、愈々其の行動を有力ならしめんとしつゝある。例せば在伯林國民教

育擴張會の如き、個人の協會員を外にして、二千有餘の團體を包括して居る。亦盛なりと謂ふべきである、而して協會の中央本部は、主として鼓吹的行動に、各地方の支部は、主として實施的行動に當つて居る。

◎協會の實施的行動は、主として青年及び大人に對するもので、其事業に現はれたる形成は一樣でない。幼稚園、兒童保安所、兒童夏期殖民（第八十三號參看）、徒弟寄宿舎、家政學校等の設備の如き、随分他の善慈的團體と相併んで、協會も亦經營する事業であるが、「國民教育協會」の主たる實施的行動と認むべきは、一、講演及び講習、二、良書の弘布、三、國民圖書館、及び公衆閱覽所の設定、四、國民共樂會の開設である。左にこの數者の方法に就て聊かお話しして見やうと思ふ。

◎講演及び講習 協會の第一の仕事は時々講演會を公開することであるが、開が果して効果を奏するや否やは、主に講演の題目及び演者の撰定如何に關するので。聴衆の身分、職業、階級、教育、宗教等が區々であればある程、演題の撰定は益々六づかしくなる。漫然政治的、宗教のことを云はふものなら、動もすれば一部聽衆の嫌惡を招き、甚だ面白からざる結果を來たすことがある。况んや初めより故意的に、諸種の分子の雜つて居る一般の聴衆を政治上又は宗教上の或る一派の方向に引付やうとする様なことがあれば、それこそ大に八か

せしむるに相違なき。『國民教育協會』は可成中立の態度を採り、演題の如きも、成るべく當り障りのないものを選び、ことに於て居る。

●當該地方に於て若し適當の講演者を得られないときは、所謂巡迴演說家なるものを依頼することがある。巡迴演說家は、常に諸方を演説して廻るのを商賣にして居る人で、通俗的の趣味ある話にかけては、天晴練磨の功を積んだものである。殊に自然科学及び技術に關する話などは、普通の人の手にかけると、或はうつし繪にして形はし、或は標本を示し、或は目前で試験をして見せるなど、我々の道具立を使用し、巧に説明するから、自然一般聴衆も喜んで聴くと、いふ様な便利もある。で、若し或る地方の協會が、この巡迴演說家、又は其他の講演者を、遠方から招待する必要があるときは、多くは他の地方の協會と連合して、甲處から乙處、乙處から丙處と、それからそれへと各處の講演會に臨ませる仕組にして、以て其の演說者に與へる旅費、及び報酬の幾分を節する習慣になつて居る。又一地方の協會が、同地方の他の組合、例へば工業組合、公民組合など、共同して講演會を開き、其の費用を分擔することもある。

●國民教育協會は、斯くして段々と盛んになつて行つたが、同時に一般聴衆の耳が肥へたものか、彼等は最早從來の如き演

說家のみを以て満足せず、更に第一流の學者、殊に大學教授連に就て、親しく聞くあらんことを希望するに至つた。大學教授の方でも、初は協會を以て、國民間に半解的教育を流布するものとして非難し、而も自からは敢て其の改善に手を着け様とするでもなく、只超然と澄ましこんで、小言ばかり云て居たものであつたか、時勢の必要は遂に彼等を驅つて、通俗講演の壇上に立たしむるに至つた。英國で所謂『大學擴張』(University extension) 獨乙て所謂『國民大學運動』(Volks-Hochschulbewegung) とは、即このことを意味するので、この運動は、諸國多數の大學で着々其の歩武を進めつゝある。

●協會の施す教育の屢々半解的に終ることあるは數の免かれざる所て、關聯せる知識の一斑を抽出して、教育程度の極低い聴衆を相手に、系統を追はず一回の講演で話すのであるから、何うも然らざるべき筈なのである。然らば此の弊のない様にするには何うしたらよいかといふに、先づ一回宛の講演の代りに、數回に亘る講演、又は講習を開始し、稍々範圍の廣い題目に就て、章節を追て講義的に説明し、且つ一々適宜の参考書を擧げるのが一番よいので、將來國民に對する教育方法の改良發達が、此の方針に従つて進むべきは疑を容れない。前掲國民大學運動の如きは、此の方面に於て有力なる端緒を啓きつゝあるのである。遮莫半解的教育は、苟も其の事柄の良好なる限り、無教育に勝る萬々である。

●良書の弘布 「汝の讀む物を吾に告げよ、我れまた汝に汝の如何なる人なるかを告げん」とは良書弘布の効能をよく云ひ盡したる言と謂つてよろしい。良書の弘布に關する協會の行動は、主として一、書肆、著述家の議に與り、會の希望及び經驗を述べ、通俗にして而も趣味ある學術的書籍の出版を奨励すること、二、場合に依りては本支部共同して、豫め發行部數の一分を引受くることで、時としては會自身で良書を出版し、又は賞を懸けて良書を募ることもある。在伯林『國民教育擴張會』の如きは、凡二十万圓の資産を有す、毎年事業費として五萬圓程宛支出することが出来るが、從來良書弘布の上に貢獻したるところは頗る大なるものである。又ライマル(獨逸)なる『良書弘布會』の如きは、其の名の如く、單に良書の弘布を計ることのみを目的として居る。瑞西、奧大利等にも矢張之と同様の會がある。

●國民圖書館及び公衆閱覽所 國民圖書館及び公衆閱覽所の設定は、通俗講演と共に、『國民教育協會』の重要な行動の一であるが、この件に就ては、協會は國家、地方團體の保護、密附行爲、其他私人の慈悲に待つ所が多い。這種の事業の最も發達して居る所は、英米二國で、英國には特に圖書館税といふ地方税があつて、年々各市で圖書館の爲めに支出する額は、合計七八十萬圓に上るといふとて、圖書館の數は英國全體を通じて七百程あつて、(即人口十二方に對し圖書館一の割

合) 備付の圖書は、五百萬卷の上に出で居るといふことである。同國で一番舊い國民圖書館のあるマンチェスター市では、圖書館の爲めに年々十餘萬圓を支出し、毎年七十萬卷の圖書を館外へ貸出し、館内でも矢張それ位の圖書を貸與するといふ。米國に至つては又一層盛んなので、千八百九十一年の調査に依ると、少くとも千卷以上を有する圖書館が三千八百三箇あつたとのことで、就中この設備にかけて最も發達せるマツサチューセツツの如きは、人口僅に二百五十萬の小邦でありながら、二百七八十萬卷の圖書を有し、千八百九十一年度には圖書館の爲め百數十萬圓の金を投したとのとである。

●國民共樂會 國民共樂會とは、衆人を一所に會して、或は音樂、演藝等を催し、或は教育的よりは寧ろ愉快的趣味の多い演説を試み、衆人談笑の間、不識不知、親和的精神を養はしむるを目的とする集會で、『國民教育協會』の社會的性質は、此の設備に於て遺憾なく發表されて居る。英國には「トインビーハウス」と呼ぶ一種の國民俱樂部の設けがあつて、全國では其の數は凡四十程ある。又米國では七八十もあるとのことである。

●上來述べたる意味の國民教育、即社會大多數の青年及び大人に對する教育の、社會貢獻する所極めて大なるはいふまでもないことであるが、我國に於て、未だ主として之が經營に

任する團體の組織を見ざるは誠に遺憾千萬の事である。或は既にあるかも知れないが、若しありとすれば、早く歐米の『國民教育協會』の様に、世人の注目をひくに足るべき、大々的活動を開始して貰ひたい。我國も文明國とか、強國とかの一面に數へられる以上は、何うか這般の運動も、負けずに盛んならしめたいものである。吾人は茲に社會的國民教育會の勃興を熱望すると同時に、尙ほ一つ社會全般殊に各種の團體に對して注文すべきことがある。それは他でもない、各自それ／＼分に應じて、成るべく社會的國民教育に資する様に心掛けてもらひたいといふことである。蓋し『國民教育協會』の仕事は、必しも協會特有のものではなく、随分他の團體又は個人でも之を兼ね得るものであり、又實際或る程度迄は現に然かしつゝあるものもあるのである。例へば學術的團體は講演に於て、書肆は通俗の學術的著書の出版に於て、國家、地方團體又は個人の寄附行爲は圖書館の設立に於て、宗教團體は青年會の組織に於て、孰れも皆『國民教育協會』の目的とする事業の一部を實行しつゝある。吾人はこの意義に於て、各團體又は個人が、今後大に社會的教育の經營に着目せんことを望むのである。歐米に於ける政黨又は宗教團體、例へば社會黨、新教々會、舊教々會の設定に係る勞働者組合の如き、亦『國民教育協會』と一部分其目的を同ふするものであるが、之に就てのお話は他日を期することとしやう。

### 人性の苦味

曉 鳥 敏

路の臺は苦いからと云ふてむげに捨て給ふな。かに料理すればうま味はへるであらうかと考ひ給へよ、道の友。人生にはいつも順境ばかりある事は到底望めない事で、時には逆境の來るのは豫め覺悟をして置かなければならぬ。長い年月の間には面白い事もあらう、辛い事もあらう、可笑しい事もあらう、嬉しい事もあらう、悲しい事も苦しい事もあらう。面白い事だからと云ふて、一生漚漚くものでもない、辛い事だからと云ふて一生漚漚くものではない。雨ふりがあれば、お天氣がある、冬かあれば春かあるは、これ世の常である。一年中雨かふるでもなければ、冬か漚漚くでもない。之と同じく一年中天氣かよいでもなければ、春が漚漚くでもない、我等は此間の呼吸を深く味はねばならぬ。我等が此間の呼吸を深く味ふたならば世を過す上に於て勘からざる教訓を得るのである。

天氣のよいには晴々として氣持ちかよいと云ふ趣味かある。

雨天にはしつとりとして心か落付くと云ふ趣味がある、春にはゆつたりとして溫和な趣味がある。冬にはしつかりとして嚴格な趣味がある。之を反對の方面から云ふと、晴天と春には浮々して厭な所がある、雨天と冬には隱氣臭くて厭な所がある。私はこの厭な方面を見ないで、趣味を傳ふてまいりたいと思ひます。

小供の頃には菓子や菓物の酸味は喜んで味ふ事をするが、露の臺の苦味や唐辛の辛味を味ふとかてきぬ。刺身や羹物の味を知つて、海鼠やコノワタの味を知らぬ人は未だ料理通とは云へぬ。口の進んだ人であるならば、菓子は菓子で其味を知り、果物は果物で其味を知り、露の臺は露の臺、唐辛は唐辛で其味を知り、刺身や羹物の味を知ると同時に、海鼠やコノワタの味をも知るであらう。尙ほ進んで云へは能く口の進んだ人は濃厚な料理よりは反つて露の臺の味嗜あゑ位を喜ぶのである。人生に處するに當つても之と同じである。修養の足らない人は順境の砂糖だけは趣味を感じて得るか、逆境の苦味辛味に至つては味ふことかてきぬ。夫て凡人はいつも順境ばかりである事を望んで居る。

然し順境は春と同じく人を怠惰にするもの、晴天と同じく人を浮々とせしむる性質のもの、故、人が若し順境ばかりで生活して行つたならば、のろ／＼した、浮薄な人間と成り終るのであらう。夫てあるから逆境と云ふものと顯はれて來て、こ

の人に勉勵心を興へ、落付きを教うるのである。逆境には苦味のやうな辛味のやうな、しまりがあつて、人心を刺激してヒリ／＼せしむるの力がある。之れは我等が一人前の人と成るには缺くべからざるものである。

晴れた夜の月もよいが、雲に隠れた月にも趣味がある、叶ふ戀もよいが、叶はぬ戀にも趣味がある。夫婦同居すると云ふに溫和なる趣味があるが、互に忍んで別居して居ると云ふにも曲折した面白い趣味がある。幼にして親に別ると云ふはあまり甘い味ではないが、この苦味は料理の仕方では非常な珍味となる、貧乏と云ふは人生の辛味であるが、この辛味も時には沈滞し怠慢になり行く胃腸を刺激して活潑ならしむるには大なる力がある。

人が賞讃してくれる砂糖のやうな言葉もよいが、之ばかりでは何だか、たよりのない、こたえのないやうな氣持ちがする、そこへ攻撃諍難の聲でも聞くと、何だか身體が凍とするやうで、勇氣も出れば落付きも出て來る。賞讃者ばかりでは決して日進も出來なかつたであらう、ソクラテスも出來なかつたであらう。

人生に於ける苦味辛味と云ふものは、我等の精神を健全に鍛ひあげるには缺くべからざるものである、又能く味ふて見ると、この苦味辛味には甘味や酸味の及ばぬ好味がある事がわかる、齒の丈夫な人はあまり柔かな食のみでは満足しな

彼は時に窓ごたえのするものを好むては、精神が確かりして居ると、いろ／＼の困難や辛苦と戦ふのも中にある業である。

私は春の夢のやうな野邊を蝶の後を追ふて散歩するの面白くと思ふが、之と同時に冬の吹雪の山路を息も絶え／＼に歩くと云ふ事にも面白味を感じるのだがとちか／＼と春の野の散歩の方が怠け易く、冬の山路の歩行の方が奮勵するに便宜である、故に私は富よりも貧忙に多くの力を得るのである、賞讃よりも誹難に多くの力を得るのである、相見ての嬉しさよりも別れの辛さの方により多くの力を得るのである。それであるからして私には人生の艱難も辛苦もこよなき助手である。而して私は常に思ふ、私のやうな怠惰に陥り易い性分の者は、春のやうな順境ばかりでは終に精神的死に至るやも知れない、晴天のやうな舞臺のみ開けて居つたならば浮薄極まる者となり終るかも知れない。故に私は折々冬のやうな嚴肅な覺悟に逢ひ、雨天のやうな幼寂な指導に會はなければ到底健全な發達がでないと思ふ。

坂を登るのは困難である、苦辛である、之に反して坂を下るのは容易である、得意である。我等が人生の行路を行くにも容易で得意であつたならば下り坂に向ふものと思はねばならぬ。又困難辛苦に出逢ふならば、自分は進歩の坂を上りつゝあるものだと思ひて、力をこめて之に打ち勝たねばならぬ。

我がやうであるけれども、書を能するものは其人体の上一段の風采を加ふるもので、強ち排斥すべきものではなからふと思はる。

御家流ですか、……それは柔順なる所が最も長所で、而も筆力雄頭をも含んで居る。殊に平和なる筆遣ひであるから最も婦女子に適當して居る。この御家流の筆道は尊圓親王の御一流で、青蓮院門跡に相傳されたのである。本邦最初の筆跡は弘法大師入唐の節、韓方明より傳へられ、歸朝の後、嵯峨天皇へ御傳授になりて以來千有餘年を経て、今日にまで其書系断えずして傳はりて居る。筆道に於ては嵯峨天皇と弘法大師とを二聖と稱し。道風、佐理、行成を三賢と稱し。敏行、文正、保時、時文を四輩と稱へて、其書風各々變ずる所あるも、いづれも一系の書法を相承して居る。尊圓親王は此等古賢の筆法を集めて大成し、上代の風格を一變し、異様の運筆なく、異様の字形を用ゐず、士農工商を論せず、何人にも適用する一流の書體を開き給ひたるが此御家流であつて、廣く世間に行はれ、久しく年を経たのである。朝廷の諸博士は弘法大師の筆法を相承したが、諸藩の諸筆は書風各異る所あるけれども、大体は此御家流より分出したるもので、之をみても盛に世に行はれた事がわかるのである。

或人が私に書に書法といふものがあるかと問はれました、其時私は書法がないと答へました。何となれば書は鳥跡を見

それで私は諸君と共に人生の苦味辛味に就て深い興味を持つて力ある生活を如來の榮光の下に送らしてもらひたいと思ひます。



南村閑話(二)

百目木 劍 虹

三. 翁の書

私は世に誇るに足るべきものは一つも身に習得しませぬが、書道にいたりては幼少より學び聊か其堂奥に達したと思ふ。勿論私の流義は御家流であるが、私は子昂でも文徵明でも何でもかきますが、全体其流義を學ばぬ人はいくら見事にかいても、書體に欠點のあるもので悟入したものとは云へぬ。昔は書の尊ばれたとが非常のもので、支那に於ては身言書判と云ひて書も亦仕途の一資となられ。我邦に於ても俗に手半學と云ふて、手をよくかけば學問の半分にあたると思ふ位に筆道を重ぜられたものである。今日よりみれば左まで益な

て發明したと云ふ位であるから、もとより書法のあるべき筈はない。併し宇宙には陰陽向背と云ふものがある、また緩急遲速と云ふものもある。この天地自然の法則に従ふて、知らず識らずの間書法が成り立つたもので、書法とて別にあるわけではない、天地自然の法則其まゝ書法である。これ書を學ぶもの、宜しく工夫すべき要點である。

一体日本にては何事についても系統とか相承とかを尊ぶの習慣がある。生花には遠州流もあれば池の坊もある。書には狩野派もあれば光琳派もあると云ふ具合に、それ／＼系統を傳へて、其流義井然として少しも紊れない。これは頗る結構の事で、飽まで此系統をたやさぬやう心掛けてゆかねばならぬ。而し此書風のみが近來甚だ衰微して少しも顧る人がない慨けかほしい次第である。帝室に於ては技藝員を置いて繪畫彫刻等の美術に就て、それ／＼獎勵し鑑査を行はしめてあるが、獨り此書法に就てのみ其道の人をおかぬが甚だ遺憾のやうに思ふ。

四. 還俗儒者

徳川時代の儒者がいづれも揃ひも揃ふて、佛敎を排斥したは種々の原因もあらふが、一つは坊主悪けれや袈裟までもの喻の通り、僧侶の待遇が過分であつたから、半ば嫉妬の念より排佛家になつた事であらふと思ふ。殊に可笑しい事には最も佛敎を排斥した儒者仲間にはもと僧侶で還俗したもの

多い事である、彼の朱子學を唱道した藤原惺窩の如き、山崎闇齋の如き有名なる儒者は一たび佛門に入りたもので、若し然らざるものと雖、多くは佛教に關係を有せざるものない位である。殊に闇齋の如きは佛をすて、儒を學び、後ち神道を唱へた人て。誰やらが云ふた通り、闇齋をして今日生存せしめなば、神道をすて、更に耶穌教を信仰したてあらふと云はれだが、兎角無定見の人が多いやうであつた、此等の還俗儒者より、佛教排斥の聲を聞かふとは、頗る滑稽の次第ではな

五、潮音、行誠

師の門弟に感化を及ぼす力と云ふものは實に偉大なるもので、行誠上人の洒落のところは全く師たる潮音の感化を受けたる者であらふと思はる。潮音師の事に付て委しいとは知らな

いが、駒込の西教寺に居られ、眞宗の學匠で當時名高いものであつた、金剛索やら摺袈邪網などを著して、赤裸々、又は出定後語を駁撃した處を見ても、學者であつたに違ひない。彼の護法漫筆をかいた、松平冠山老公と極めて親しいやうであつた。私が行誠師より直接聞いた話であるが、ある時私か(行誠)師(潮音)の許に参りた處が、既に講了後で、師は之より法要に出掛ける所であつた、サア行誠御馳走に連れて行くから早く用意せよと云はれた。ソコテ私は他宗のものでありま

た。イヤ、遠慮に及ばぬ、私(潮音)と連れ立つて來れよとて、とう／＼或檀家にいきました。時に御主人今日は賓客を連れて來たから、讀經は後にしてまづ御馳走を先にして呉れよと云はれた、應て饗應がすむと、行誠もう歸つても宜しいと云はれて、私はお經を讀まないで匆匆歸り去りた事があるとして、行誠師の親しく余に物語せられた事がある。此一事を見ても萬事無頓着にして物事に凝滞せず、胸中洒々として潮音の感化を受けたものであらふ。此人の逸事にもなかな

か面白い事がある。私か一日行誠師を訪ふた時、一人の侍僧か上人に法衣を纏はせて居つた。師微笑しつゝ侍僧を顧みて、之より御布施を頂戴するのだが、御布施はまだ向ふの懷にあるから、なか／＼油断は出來ぬ、併し法衣の着損になることはなからふと云はれた事があつた。其言人の意表外に出て、諷刺骨に徹するやうであつた。又或時二三の婦人が居る前に色々の物語せられた時、色川某の婦人を見誤りて、青繙の細君と思ふて貴家の前にある石塔の恰好が大變よく出來てあるが、高さ幾尺位あるであらふと問はれた。傍の人和上それは青繙の婦人ではありません、色川の婦人ですと答へた。すると行誠師、笑ひながら老人と云ふものは兎角若い婦人の顔を眺めるとはよからぬ事ゆゑ、人違ひするのも無理ならぬ事であると云はれたやうである。如何にも當意即妙談笑の裡

にも人をして敬服せしむる所、大概此類であつた。

行誠師また曾て長野善光寺に参詣せられた事がある。當時大勸進(天台宗)と大本願(淨土宗)との間に何事か確執を生じて、兩方面く執りて動かぬ熱度の高い最中であつた。其時行誠師一向無頓着に敵の大勸進に参りて十念を授けられた旨を請ふた、大勸進にては辭退をした。處が、行誠師は貴下方を善光寺様の老臣と思ふて居るから、何にも辭退するには及ばぬと云れた。然らばといふて今の天台宗の村田寂順が十念を授けたやうである、行誠師旅館に歸るや、今日は十念を授かり善光寺へ参詣した所詮が届いて、やれ／＼喜ばしい事であるといはれたには、人々皆海の如き宏量に一驚を喫したやうである。自分の宗派と他宗と葛藤最中、謂はば敵中に入り込んで恩怨一如平然として意に介せざる所。近來の高僧である。

六、山寺の鐘

海原にまたもや火花をちらすらむ  
入相つけし山寺の鐘

これは野々口隆正と云ふ人の作で、幕末の實景を寫したなか／＼の名吟である。當時幕府が浦賀の砲聲に驚いて狼狽周章俄に戦争準備にかゝつた、先づ諸國の寺院へ向けて梵鐘引上の布令を發した、然るに梵鐘引上の命令を發するに當り、幕府の名を用ひないで、太政官の符宣とした、是か抑々追々と朝廷の御威徳回復して幕府の威信漸く地に落ちかゝつた兆

候である、入相つけし山寺の鐘、諸行無常とひびき、いかにも寂寥たる晚景を破りて、餘音哀々として遠くきこえ渡り。人をして坐ろに徳川の末路を忍ばしむる心地がする。

椿花帖

一、枯木寒雲

多田鼎

去年の暮より今年の始にかけて、十日餘の間私は、故郷の人となつた。緑の装もなく紅の飾もない枯木寒雲の景色は、深く私をして嚴かに感ぜしめた、其上に、父老兄弟及び姉妹が、學問もなく智慧もない代りに、其衷心の所信を、繕はず飾らず打あけ來るに出遇うては、平生偽多く飾多い私の心も何となら其ために融かざるやうに覺えて、身は木枯が浙瀝として荒れずさぶ間にありながら、一種あた／＼かな春風に

ままれて居るやうに思ひました。  
嬰兒の入り來る室の人は、皆嬰兒になつてしまふ、至誠の前には、何等の虚偽も、終には其頭を下げてしまはねばならぬのである。故郷に在つて、私は今更のやうに此道理を感じました。

一、瞬時の生活

日本現時の國民、四千六百萬人の中で、一年の死者は殆ど

百〇六萬餘の多きに及びて居る。して見ると平均四十二三人の間で、一人づゝ死んで行く割合である。この割合を以て世界十五億の人類の中の死者を算へて見れば、殆ど三千五六百萬にも及ぶことであらう。今之を一秒の間に割當て見れば、平均一人以上宛た必ず死んで行く勘定である。驚くべきことではないか。人は鳥鳥の噴火で死人の多かつたのに驚き、國府津あたりの海嘯で被害者の澤山あつたのにびつくりするけれども、視よ、かやうな噴火なくとも、海嘯なくとも、常に一分間に六七十人、一時間に四千人程宛の人は、た必ず死んで居るのである。「死」の噴火、「死」の海嘯は、た必ず此世界に荒れ回つて居る、ちやうど枯葉が秋風の前に散り行くやうに、人間はばらばらりと此「死」の前に失せ行くのである。「而も之が遠い處にばかり、荒れて居るのではない、近く我々の周圍に荒れて居る。我々の親族隣人、師友知己の中、いかに此ために捕へ去られた者が多いかを見よ。我々は實に今此「死」の猛火、「死」の逆浪の中に圍まれて居るのである。而も我々が互に今日迄の生活を保つて居るといふことは不思議ではないか。それも特別に堅固な身體を保つて居るならば、まだしもであるけれども、御互に葉末の露よりも脆い、風前の燈よりも消えやすいをひかへながら、我が親族隣人の多くが死に行く間に、我が師友知己の澤山がうせ去る其中に縦ひ唯今瞬時の間なりとも、かくすぐやかに存らへて居るといふことは不思議の至ではないか。

「かくいはゞ謂ふ者があらう、別に怪むには及ばない、生存するだけの作用、我身に行はれて居るから生存して居るのであると、けれども我身に此生存の作用が行はれて居るといふことが全體不思議ではないか、私は未だ曾て肺に呼吸してくると頼むこともない、血に循環せよと命じた覚えもない。然るに肺は我がために呼吸の作用を爲し、血は我がために循環のはたらきをし、四肢五官、各々我が命令も依頼も待たず、かく動きはたらいて我一身を支へつゝあるのである。靜に之を想ひ及ぶとき、どうしても我以上の力を感ぜずには居られぬ、實に我以上の佛により、我以上の佛の靈能によつて、我此一身の生活が保たれて居るものであることを感ぜずには居られぬ。

「されば瞬時の生活、猶ほ是れ佛の御力によれるものである。刹那の生存、猶ほ是れ佛の御慈悲に基けるものである。それ故、よく考へて見れば此身は、私のものゝ如くあつて、實は私のものではない、佛のものである。我には之を忘れてはならぬ。之を忘れて、この佛のものたる我身を、我が私情私慾のために妄用するやうなことがあつてはならぬ。然るに我々の今日は全く之に反對した日をくりのありさまではないか。人の食を食ふ者は、人の事に死す。我々は今日唯今、如來大靈の御前に跪いて、謹んで既往の罪惡をわびたてまつり、い

さざりく如來の天命をうけて、その命したまふまゝに動き、その仰せつげたまふまゝに進み、他の一切の誘惑を断乎として退け去つて、この如來より賜はれる生活を汚したてまつるといふことのないやうに致さねばならぬ。これ我々の上に降つてある光榮ある職務ではあるまいか。

十二月廿二日、私は故園の佛堂で、かやうな意味を感じて、之を我前に集へる僅かの同朋に語つた。之について、ふと思ひ起すのは、トルストイ氏の『再生』(Resurrection)の一節である。

三。 夢物語

十二月廿六日の夜、深更、僅かなる同朋の集會が、故園の佛堂で開かれた、信仰及び之に關聯して問答が幾度も繰返された間に、太陽を拜するの可否などを尋ねる老嫗あり、法義の盛でない山奥の村に嫁入つたことを嘆いた少女などもあつた。其中に一人の女子が自分の精神上の經過を陳べて、一つの夢によつて大なる指導を得たことを語つた。その夢はかうである。

去る舊曆の二月十五日、温泉會の曉のことであつた。私は、もう夜があげたやうであるから、起さればなるまいと思ひながら、何となう臥床を離れられて、ぐづ／＼して居る間に、うさ／＼と致しますと、私の頭の上で、私の名を呼ぶ聲がきこゆる。誰かと思つて頭を擧げて見ると、驚きました、大空に、ひさりの大きな佛の御姿が現はれて御座る。ぞと不思議のこぢやと思つて、よく拜みますと、それが御釋迦様の御姿である。うして兩方の御手に澤山の人を引きつけて下さつて、西へ向つて雲のきれ間／＼を驅けて御出

てなされるのである。之を拜むて、私は、これが正しく平生願つていたいて居る此土發遣の御姿である、釋尊が此國の我同朋を導いて、無量光明の如來の御國へ御送り下さるゝ御姿は、正しく之であると思つて、あまりの有難さに、われ知らず頭を下けたと思ひますと、夢であつたことに氣がつきました。

皆さんは、何ぞ御思ひなされる。存じませぬが、私は此夢で、ありがたい澤山の御導きをうけました。之を聞いて、かたへのもものも、少からず感じたやうである、私も深く感じました。その夢の意味に、いろ／＼の淺からぬ味があることは申すまでもなく、私は其外に、この夢を見た女子其人の心の麗はしいことを思つて、尊敬の念に堪えなかつたのである。若し夢を以て、自分の眞價がわかるものとすれば、私の如きは實に申様のない卑劣な動物である。眼、佛の御名を示せる文字に遇はぬ日はない、口、如來の御慈悲を語らぬ日はない、されど私は茲に白狀する、今日まで、まだ一度も佛を夢みたことはない。殊に病のために、殆ど一夜として、何か斯か夢みないことはないのに、かやうな清淨な尊嚴な夢に遇ふたことは、決してない、竊に自分の汚れて居るのに驚くより外はありませぬ。

之について思ふのは、『御傳鈔』である、この書は諸君の存じて居らるゝ如く、親鸞聖人の傳記であつて、夢に關する記事が頗る多い。それがため、之を以て一篇の夢物語と名け、その價値や極めて少いものであると認めて居る人もある。私も斯様な工合に考へたことがありました。けれども之は大に

誤であつた。なるほど『御傳鈔』に夢物語は多い、けれども之で以ていかに聖人及び其周囲の人々の宗教的精神が猛烈であつたかといふことが洞察せらるゝてはありませぬか、殊に多くの人が冷笑を向けて居る六角堂の夢の如き、いかに聖人が其處世上の問題を定むるに當つて、少しも自己の私見を雜へず、一に之が解決を如來の大令に仰がせられたかを明かに示し、又蓮信及び平太郎の夢の如き、彼の人々がいかに赤心より聖人の高德に歸依して居つたかを明かに示して居る、加ふるに六角堂の夢は、人生問題の意義を嚴かにあらはしたるものであり、又平太郎の夢は、たとひ信念を確かに得て居つても、時には不安恐怖の思が起る、併しそれは一時のことであつて、直に師聖人の教訓に安じて、神其外のものならば、神明たるも菩薩たるを問はず、習慣であらうとも、儀式であらうとも、悉く打すて、顧みざる勇猛の大信心に安ずべきものであるといふことを、明かに示したるものであつて、共に大なる宗教上の指導を與へて下さるゝものである。

されば私共は、此等の夢物語によつて、一は昔時先進の宗教的精神がいかにほど壯烈であつたかを辨まへて、自分の警策となし、一は種々の深遠なる意義を味はうて、其中より尊い教訓を受け來ることかてざるのである。私が抛つて顧みまいとして居つた一篇の夢物語は、思はざりき、極めて尊重すべき寶典でありました。

#### 四 獨語の妙趣

或る隣村の農翁が、私に語りました。

毎朝、後るの山へ、柴刈りに参ります所、同行の者がありませぬと、私は平生承つて居ります聖教の御話や御訓を採り出して、獨り御話を致しながら参ります。すると自分の口で申して居ながら、唯もう有難い思ひ、抑へきれないやうになつて、獨り涙に咽ぶやうなことがあります。

不思議なことはありませぬ。此時、私の口に現るゝ語は、佛の御語であつたその聲は佛の御聲であります。

高峯の頂に立つて、獨り歌ひ、曠野の中に一人で獨り嘯く妙趣は、多くの人の實驗して居る所である。けれども必ずしも山中に限らず、原上に限らず、室内でも、路頭でも、獨り静に如來の御光を歌ひ、如來の御徳を語るの妙趣に到つては、又特別の、而も一層も二層も、多くの妙趣がある、この時に於いては、別に他人から求められたり、めでもない、又他人に聞かさうというためでもない、たゞ、内心の奥深い處から、歌はずに居られず、語らずに居られない一種の要求が湧き來つて、そのために歌ひ、そのために語るのである。この時、誰も自分の外には居ないと云ふことを知つて居ながら心の中は、極めてくゞにぎやかな思になつて、我知らず陶然として春光に酔へるが如き趣があるのであります。

道友の中で、平生此趣を語る者があります。私も亦同じ感じをもつて居た處、此農翁の話を聞いて、世に同感の者の、少くないことを認めました。

### 心證いたれば萬法無礙

仁科 幽 齋

行ふこと多く爲すこと繁き人生五十年。半ば臥して半ば懸へば、餘すところ幾何ぞや。百の見聞千の學究徒に憂愁狐疑の奴となつて、三千年前の書併を偷み且つ傷くるの僧徒たらんは何事ぞ。いでや我等は無垢淨信の道友と俱に、末世の佛子をはぐくまむか。とはこれ此稿をなさむとするに先だち胸臆を衝いて出でたる數言なり。

それが果して何い、人生その要を擧ぐれば、婆娑萬法界裡に、一面は歡喜で、無事(無事)の無きは煩惱のなきなり、名聞のなきなり、痴戲のなきなり、遊惰のなきなり。自分の職責を盡すを以て足れり。(王者に王者の職あり、大臣に大臣の職あり、軍人に軍人の職あり、宗教家に宗教家の職あり、農工商に農工商の職あり、佛僧婆羅門車夫馬丁と雖、各其職あり。序記して曰く。昔は無量意菩薩あり、佛に白さく、親世音菩薩は如何なる方便を以て衆生を説くやと聽けり。佛の曰く、親世音菩薩は威神力を以て衆生を説けり。この故に、もし衆生、王者の身を以て得ず(へき者)には王者の身を以てし、大臣の身を以て得ず(へき者)には大臣の身を以てし、軍人の身を以て得ず(へき者)には軍人の身を以てし、宗教家の身を以て得ず(へき者)には宗教家の身を以てし、農工商の身を以て得ず(へき者)には農工商の身を以てし、佛僧婆羅門車夫の身を以て得ず(へき者)には其身を以てするなり。又一面は融通無礙如何なる事にも滞ることなく自在神力を備へ居れば足れり。

題して曰く、心證いたれば萬法無礙なりと、予や如來の大恩によりて人生二面の要を體達せしが故にしかいふのみ。今、

心、堂奥に在り、坐して門外十方を觀れば、一萬八千の法燈かゞやき、一燈ごとに、八萬四千の衆生、合掌禮拜して止まらず。いで我、如來の信智を受けてこれを記さむか。

諸子よ、文字に著する勿れ、一萬八千の法燈といふとも、もし我等、肉眼を以て之を望めばその得る所、期して一半もなきや必せり、よしんば、肉眼上の法燈、假令一萬八千は愚か、無量無數かゞやくるも、亦無量無數の風來つて之を消さなむ。はた、我に心證あり、如來の信智に入ればとて心自ら驕れば、忽ち化して地獄阿鼻焦熱の猛炎となり、心身掌に亡びなむ。予、正心正念虛々無盡藏の如來の信智を開いて、一燈ごとに禮拜供養する衆生を見るに、今や正に大略して二手に別れたり。一手は他力淨土の門これなり。亦、一手は自力聖道の門これなり。此中、他力に居て自力を陥れ、自力に居て他力を侮らざる衆生は、未だ心證に至らざるなり、融通無礙達せざるなり。尙此中、他力に居て自力を輕しめず、自力に居て他力に遊び自力にも語りひたるものは、既に心證いたりて萬法既に無礙なるものなり。尙ほ見よ、

ワケノボルフモトノミチハカハレドモヲナジタカネノツ

キヲミルカチ

さらば云はむ、念佛者は念佛を以て奥殿まで至れ、心證必らずいたらむ、苦行者は苦行をもつて、禪道者は禪道をもつ

て、聲聞者は聲聞をもつて、妻帯者は妻帯をもつて、難問者は難問をもつて、心證の奥殿にいたるべし。凡て有難者に無難なればはざるなり。無難者に有難なればはざるなり。孰れからしても到達すれば、如來の信智に飯して萬法無礙。所謂自在神力を得べきなり。大道是一といふも、即心即佛といふも、根本原理といふも、安心立命といふも、一切即一、一即一切といふも、萬法唯心といふも、即實在といふも、歸命無量といふも、一念默契といふも即ち此真味に外ならざるべし。

さらばまた云はむ、菩薩行といふも此真味なり。未法、三千年後の信佛者は、かの印度黒谷の行者のごとく、或は遠く婆羅門仙のごとく、五戒十戒五十戒五百戒二千五百戒を修せむとしてはむづかしきなかにむづかしきを修し、たゞその職を濫さず、機を誤まらずんば、王者は王者として菩薩行を修し得べく、裁判官は裁判官として被告原告を料理しながら菩薩行を修し、犯罪既決者は既決者として監務に在りながら一念發起すれば此行をして適れ修了すべし。軀体は以て世の動搖に従つて動搖せしめよ。心体は常住觀樂を得べきものなるが故に、努めざるべしむや。文字に係はり、言葉に着し、古書に蟠り、自智に眼暗むの輩よ。汝の前にはいかにするも心證の奥殿開かれず、三千世界の淨土も来らず、かの門外十方に滿つべき法燈の、一萬八千は愚か一毫一才もこれあらざるべし。

るべきなりと知れ。

さらばまた云はむ。心證無礙なれば有漏の状態は、掌をかへさるに、一化し盡くすどが出来るなり。一化し盡くすとはいがな、天變、地異、病魔、はた、龍暴れ、夜叉怒り、乾闥婆驅けり、阿修羅吠え、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦、人非人等（妙法蓮華經普門品）、一度に來つて我等佛與の娑婆世界を打亂さむも、心證、これを一化して何等の障礙あるとなさざるが故なり、或は王者怒り、大臣貪り、頻りに良民を迫害するも、この心證、即ち無礙はどこまでも無礙なるを得べく、如上人の二面觀は實行し得て毫も昌平の禍とはならざるなり。但し、之を得むと欲せば、人間智を以てするの無効なるを知れ。即ち唯一如來の大眞智を得てなすべきなり。

難ずるものあり、如來の大眞智第一に解し難し、斯の如くにして、汝、及び汝が輩の言説、生活上何等の効果があらむと。これ曾つて入道者の誰も逢着すべき所なるなきが。さきに文字に着する勿れ、見聞何の効かあらむといひしは茲の處なり。これ恰かも書餅を眺めて空腹を満さんとするの輩。さなくば、未だ門内に入らずして門外に不明を嘆つものに異らず、何故なれば、心證至れば大眞智求めざるに生じ、大眞智生すれば心證期せざるに至るが故なり。二者遂に一を出てず、こゝを以て十方無礙なり。人生豈に二面の要のみならんや。三面も四面も、十面も百面も、劍道の奥義も及ぶ所にあらざるべし。

ず、渠の雲生じ龍躍るをのみ神通といふべきや。疑問者尙見よ。

劍道の奥義は風の柳かな

劍道は今世と改め見るべし、風の柳は今、無礙の心と味ひ見るべし。かくして不言不説不聞不見の裡に得脱せば、何の疑問がこれに過ぎむや。

柳は緑、花は紅

自ら知らざるは、無上涅槃の人ならずや。柳の緑に於ける、花の紅に於けるが如し。人生、毀譽褒貶の爲めにその色彩を甲乙するが如きは甚だ拙策なるのみか、求道者はまさに成佛の障礙なりと知らずや。親鸞上人曾つて「念佛は地獄に墮つべき業にてや侍るらん、また極樂に生まるべき業にてや侍るらん。總じて以て存知せざるなり」とのたまふは、まさに無我眞理の堂奥に入りてはす知らずや。

嗚呼心證いたれば何物か卿等を礙ぐるものあらん。大宇宙といふまでもなけん、盡十方といふまでもなけん。卿等まづ思はずや。よく我等を礙ぐるものは、宇宙の一切や、盡十方の一切の如き小品にあらずして、我等心内に蟠まれる天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦など人非人の面々が、追へども責寄せ、拂へども暴れ出し、或は往く處、還る處、行住坐臥に障礙する絶大無量のものにあらずらんや、心證至るとは、他なし、此等惡魔の輩を心内

に絶つと俱に、即ち即佛の三十二相八十隨形好を得體するに外なきなり。

心證いたれば萬法無礙、人生、また何の云爲行動をか憂へむ。大千の眞理といふも易く、大愚の妙といふも得たり。道の友、それこれを得むかな。



吾妹に

波岡茂  
(吾家のほとりにて認め吾子して送さしむ)

彌生の初めうららかに  
日にのどけさのまさりゆく  
門邊にたてるから松に  
駒鳥春の曲うたふ  
空に慈愛の光みち  
木々の若枝に歡喜の

情あふれつ。山わらひ  
緑の野邊は下萌えつ

(そは吾か願ひ) 妹よ  
今し朝餉の箸とらん  
朝の職務を疾く了へよ  
こなたにすゝみ日光をうけよ

わか子も共に來ん。いのれ  
汝か山衣をとく着けよ  
書は予れらに何かある  
今日ひねもすを快樂まん

淨き世の形式力なく  
吾等の唇に生命あり  
なつかしき友! 今日よりぞ  
年の元旦と記すべき

今し天地蘇生り  
愛情は饒りぬ胸より胸に  
人間より地に地より人間に  
安々道を説く時機ならず

### 春の歌

疑 獨 庵

やさしく光る春の日よ、  
美妙の歌のひびくとき  
心の内の喜びよ、  
今日また幸福にあらざるか。

あはれなどてか營みに  
例の如くわれ出でむ。  
春こそ高き祭なれ、  
われは安息まむ、祈禱らなむ。

(ウーランド)

柔しき風ぞ目醒めたる。  
晝と夜となくさゝめきて、  
凡ての端に到るかな。  
芬香よ、音曲よ、新鮮らしき。  
あはれの心よ、今愛からず、  
物皆今は變るかな。

此一利那百年の  
道理説くに優りたり  
吾らの心軀によりて  
此季の靈に酔はなまし

吾らの胸は常住に  
不文の法律認めん  
今日の思ひを保ちつゝ  
又來ん年を迎へなん

或は低く又高く  
めぐる慈愛の力もて  
卑くき心を離くまば  
愛の情の深からん

來よ / 友よ祈らまし  
汝か山衣をとく着けよ  
書は我等に何かある  
今日ひねもすを快樂まん

(Wordsworth)

日に美はしき世界とはなり、  
其榮如何に行く末は、  
花限りなく咲かむかな。  
遙けき谷も花は充つ、  
哀れの心よ、今苦惱なし、  
物皆今は變るかな。

(ウーランド)

春の眼のみどりこく  
草葉の中に眺むかな。  
そをこそ吾の花たばに  
撰み出せし蘆花なれ。

摘まむとしては物思ふ  
おのが心にといきする  
凡ての思を、鶯は  
聲をば高く歌ふかな。

げに鶯ぞ聲高く、  
おのが思ひを歌ふかな、  
愛しき心の吾が秘密

凡ての森は既に知る。

(ハ イ ネ)

愛さしき谷を太陽は既に、  
またも花もて充たしぬる。  
耳新しくとことほはに  
花面にそゝぐ鶯の、  
歌の情の高きかな。  
汝れよ樂しめ、天賜を  
み神は汝れを生みしごと  
喜びましてれもはなむ。

(ケ イ テ)

鶯よ、汝は遙かに飛び去りき、  
今汝を春は再び誘ひぬ。  
汝れは復た新しきもの學び來ず。  
さればなほ歌ふは古し、されど愛らし。

(ケ イ テ)

蓮の花

光まばゆき 日の前に  
蓮の花の なやむかな。  
れもさつむりを 沈めては

夜をこそ待ため ゆめみつゝ。

月こそ蓮の 戀人よ。  
奇しき光りに 花覺めて  
こゝろやさしく 親はしく  
もたぐる面輪 あねかなる。

蓮は笑みぬ かゞやきぬ  
み空を高く 仰ぎ見ぬ。  
愛の思ひに もだわつゝ、  
はしき香こめて むせぶなり。

(ハ イ ネ)

懊惱吟

眞 佐 彦

疑に委ね來し魂つよき魂歌に老いぬ子世の道ふまぬ  
清き者の弱く果敢なく幸なきは運命の神の嫉みにやよる  
花にそむき少女が歌に耳かさぬ聖幸なや春の短かさ  
うつし世の暗黒に翼も輕げなる蝙蝠あはれ光服ふか

運命しる神よ微笑め若き子が奇しき筈に瘠せし面影  
少女入りし淵の情のふかみどり煩悶の我に盡さぬ慰さめ  
月浴びて祈禱さぐる罪人の青き額に花散りかゝる  
沙漠の花見ぬ旅に堪へぬ子のなどやさびしき道求め來し

春傷

疑 獨 庵

われ愛づる花はあれどもを知らず凡ての花に「心」探むる  
あかねさす夕日風なく花ちりて鶯なきて心亂るゝ  
われ泣く野、鶯なきぬわれ了解りぬ汝れと我とは同じもたえ  
に

春

瓠 樽

蒲公英や草鞋の下に咲き足らず  
たむぼゝや運動會の罅の内  
たむぼゝや馬杵賣る家の向ひ土手

夏

椽先きに子を抱く人や若楓  
俣立つ琴師の門や若楓  
後朝を若葉のなかの裏戸かな  
燈明や若葉の中に明滅す  
日は午なり若葉の上の測量旗  
錫杖の音消え行くや青葉山  
急流の兩崖せまる若葉かな  
棧道の見えて絶えたる若葉かな



監の非認するところとならず、トリーヤで禁ぜられたとも、他では許されて居るのを見てもわかるとて、一教監の否とする所を、他の教監の可とするとは往々にしてあるとてある。吾人は論じて茲に至り、始めてトリーヤ教監の行動を正當に判定すべき標準を得たと信ずる。彼れ教監は其の小論文(今回の處置を爲すに就て發表せる)に於て「黙すべき時は去れり、話すべき時は來れり」といつて居るが、是れ實に吾人をして怪訝の念に堪へざらしむる所である。一方に加特力黨が頻りに宗教認容の請求を提起し、認容法の成立を希望する時に當り、トリーヤ教監が甚しき不認容的行動を執るは、吾人をして異常の感を抱かしむるものである。一方に獨逸殊に普國政府が、加特力教命に對して非常の好意を表しつゝある今日、トリーヤ教監の宣戰行動に出でたるは、吾人をして奇怪の想あらしむる所以である。或はトリーヤ教監の處置は、一地方の問題に過ぎずといふものもあるも、吾人は到底之に首肯する事が出来ない。又或は今回の件たる、單に教會内部の出來事に過ぎずといふものもあるも、是れ恰も、敵國の我國に對する宣戰及び出師準備を以て、是れ敵國内部の出來事たるに過ぎずといふに等しい。抑も政府は今回の出來事に對し、果して如何の態度を採らんとするか、是れ國民の間かんと欲するところである。吾人はこの質問に依りて、政府をして成る可く、早く其の態度を明かにすべき機會を得せしめんとするものである。吾人は政府が、我國に於ける宗教間の平和及び國家の安寧を維持するに必要な態度を採らんを期待する、吾人は政府が國民を安堵せしめ、教會權力をして再び今回の如き舉

報道 一 束

に出でざらしむべき答辯を與へられんとを希望する。▲そこで首相ビュローは、立て「トリーヤ教監が今回の處置により、宗教的平和を危からしめたるは、余の深く遺憾とするところである。殊にトリーヤ教監の行動の餘りに突然にして、豫め何等の交渉をも試みたるとなきは甚だ怪訝に堪へざる所である。從來の余の政治的經歷に鑑みれば、余の常に加特力教徒の正當なる要求を容るゝに吝ならざるとはよく了解するべき筈である。併しこの問題に就て、教會及び國家が互に其の主義を主張せんとするときは、勢ひ明日より再び開明戦争の起るを免れない。故に余はトリーヤ教監が早く其の命令を取消さんとを期待せざるを得ない。余はまた羅馬教府が、今回の事より國家教會の平和を破り、一般の安寧を害する結果を生ぜざらしむる様注意されんとを切望するのである」と答辯した。

さて該事件の結末は何うなつたかといふと、トリーヤ教監の命令は、脆くも三週間の後に、教監自から之を取消すと、なつて、夫の告達は、之を宣言したる教師の口より、再び其取消を宣言さるゝとなり、漸くにして、一旦樓に滿ちたる風も治まり、驟雨の雲も跡方なく消去つて了つた。

●九十の春光夢の如く消ゆ去り、滿山の新緑蒼々として青葉の蔭涼しく聲々杜鵑血に啼く頃と相成候。あはれことしも三分の一を過こし申候。人生營々として向上の一步だも進み得

かしく存候。  
●西本願寺にては本月一日より五日間、鏡如法主の傳燈奉告式を執行せられ、非常の盛會の由に候。  
●東本願寺にては兼て噂ありし如く、愈々井上伯の手を籍りたる財政整理案を發表すべく。去る三日門末一同に向て招集令を發し、今後大に勸債募集に着手すべしとの事に候。  
●彼の哲學館事件に就て一時喧傳されたる「ミューアヘッド博士は、遙に書を神戸クロニクル神社に寄せて、同事件に就て辯妄書を送られ候。其一節に

クロニクル記者足下 余は二月四日及び十一日のシヤパン、クロニクル(神戸クロニクルの週報)によりて、日本政府の視學官が其職務執行の報告を爲すに當りて、拙著「倫理學報告」中の一節に就て翻らざ、天下の物議を喚起したる事に如承せり、同視學官報告の結果として、即ち一の完備せる乃至缺點の指摘すべきなき學館の頭上に輕からざる損害を蒙らしめたる由にて、余は事並に至れるは我が著書全體の主眼及び物議の中心となりたる一節の眞意か、全く誤解せられたるに起因する事を信ずるが故に、記者足下は此事件によりて世人の眼裡に刻せられたる印象を正すべく、我が發言を容るゝに於て吝ならざるべし。余案するに、世人は動機と行爲との關係に就てを、我發説を以て夫のチャルズ一世を執したるクロムウエルの行動が、其動機に於て正視せらるゝといふ、換言すれば目的は手段を正當にすといふ、昔時の譯説の復活を見做したるもの、如し、されど是れ大なる誤解なり、何となれば我が著書の如何なる部分に於ても余は曾て斯の如き例證説明を爲したる事なればなり、若し夫れ本問題に關する我が「倫理學」一篇の全學説に至りては少しく就て辯する所あらんとす。云々

洵に海外の學者の其道に忠實にして且つ熱心なるにはひたすら敬服の外無之候。  
●哲學館夏期講習會 例年の通り東京小石川原町哲學館に於て八月一日より十五日まで夏期講習會を開く。其講習學科及講師は

- 認識論 文學博士 松本文三郎
- 東洋哲學(朱子學と陽明學) 文學士 高瀬武次郎

近世教育學 文學士 香山 作樹  
倫理學 文學士 小林 一郎  
科外として目下歐洲を巡回して取調中なる同館主井上圓了博士の現今歐洲の教育界視察談あり。尙遠來の聽講者の爲には同館寄宿舎へ入舎の便を與ふと云ふ。  
●印刷局にては奉職中死亡したるもの、爲めに毎年春季二回法要を執行して追善供養を營む例なるが、今年も去る駒込吉祥寺に於て廻向をなし、當日の參列者は上は局長より下は刷版雜役の女工に至るまで、殆ど二千名以上にて、之れに遺族として參拜したるもの四百餘名、滿堂立錫の餘地なき有様に候。嚴肅なる法要の後、近角常觀氏精神的同朋と題して、一場の法話を試み候。右了りて種々の餘興に移り、午後五時散會致され候。  
これ實に職工を遇する適當の方法なりと思はれ洵に喜びに堪はず候。  
●其後の日曜講話の演題左の如くに候。

- 法然上人(四月五日) 多田 數藏
- 宗教の必要(全上) 北村 龍造
- 知信の合一(四月十二日) 近角 常觀
- 崇高なる人格(全上) 近角 常觀
- 信仰談(四月十八日) 曉 鳥 常觀
- 利劍絶毀(全上) 近角 常觀
- 妄念起る時に(四月廿六日) 曾我 量 深
- 人生の眞意(全上) 近角 常觀
- 偉人に就て(五月三日) 楠 龍 造
- 維 摩(全上) 和 田 鼎

尙先月廿六日は例により信仰談話をひらき候。出席者八十

餘名にして室内より溢れ出候程の盛況に候。重に靈感に就ての談話致され候。

○求道學會の土曜會は去月十一日と廿五日の二回にひらかれ候。十一日は朝永三十郎氏來會せられ議論のみにて持ち續き散會致候。廿五日の夜は萩野仲三郎氏出席京阪旅行談やら、例の餘興にて大に四隣を騒がして散會仕候。

○京濱佛教徒の懇親會は去る五日上野梅川樓に於て開から候。

○大谷派の寺務顧問は始め都筑馨六氏に囑せんとしたるも、同氏辭退したるにより。更に前の警視總監安樂兼道氏に依頼する事となりしも、同氏の諸否未定との事に候。因に云ふ同派にては役員の変更ありし由。

○淺草婦人會にては去月廿五日淺草別院に於て春季大會を開き、會長岩倉夫人の挨拶、跡見花嫁の開會の辭に次て、南條齋藤兩師の法話あり。右終りて狂言、薩摩琵琶等の餘興に移りて散會せり。當日來會者は千餘名にして非常の盛會に有之候。

○猶太人はガマン祭を執行するに基督教徒の幼兒を屠り、其血を祭壇に灑げば神明の加護を蒙るべしと信ずるが。近日露國の片田舎にて一少年は猶太人に誘拐され、天井に吊上げられて銳利なる刃物にて所々を斬られ、其の血を犠牲に供へられたる由に候。迷信もこゝに至りて極まれりと可申候。

○政界は頗る色めき互り候、政友會はどうやら政府と妥協の美名の下、握手致すべしとの噂に候。先づ以て現内閣も無事臨時議會も無事に可終候。

雙榎學報 (第一號) 芝 區 日蓮宗大檀林  
魁然たる冊子にして材料豊富体裁亦可なり、附録の日宗著述目錄は以て珍とすべし。(二十五錢)

平和の旗風 (第二號) 麻 布 天 香 書 院  
實業界の雜誌にして、主として對外貿易の振興を鼓舞するにあるが如し。体裁麗はしき雜誌にして、第二號の口給に三十年前の老郷の撮影を附したるは大に珍とすべし。記事の精選に意を注きたるは、一國經濟の利導者をして任ずる本誌として喜ぶべき事なり。希は長へに發達あれ。(十五錢)

如是言

(安房の浦より信州の友に寄するの書)

先づ何事より申し候はん、生儀近來胃を病みて身心甚だ可ならず。遂に二旬の間を菱花灣頭波蒼く風清きはりに送らんと欲し、勿々として月の四日當地に着致し候、百五十噸の扁舟も風の穩かなる海の入江なるに依りては、船も動搖も感ぜしめず、四十連を數時の間に航し申候。昨年生が島島より小笠原島に見學の爲執行の際に千五百噸の扁舟に乘船致し候も、大風西より來て汪洋の大海一粟怒り狂ひ、吼え候に及んで扁舟に一片の枯葉の油表に浮くが如く、泛々搖々殆ど堪えざらん。遂に大島より扁舟を轉して此灣内に風波を避くるの止り無きに至り候ひき。之を憶へば宛も隔世の感有之候、更に兄より太平洋西兩洋にば一萬五千噸の大船が煤煙を吐き巨然として駛走致し居り候、兄より大海には巨舟を要し、小灣には扁舟にて便利に御座候。船の用は乘に在り、乘は運載を以て巧みなす。起信論にこれあり候、彼の大乗と謂ひ小乗と謂ひ應機說法といふ此に外ならずと存候。昨の賢たりし哲學的宗教、倫理的宗教、合理的宗教、曰く何曰く何、畢竟何するものぞ。五十年の一生、一波動かざり白鶴遊ぶ底の灣内と、はた洪波白浪相搏ち相激する大洋に在るは、自ら其乘る所の船に大差無くして可ならんや。世に博士あると共に愚夫あり、秀才あると共に匹夫存するなり、されば宗教の對象は高尚なる智識を有する人のみにあらざるを共に、目に一丁字を解せざる野史をも攝取せざるべからざるなり、智あると雖も無きと其間を隔する所殊別なるは勿論に候。の見て感情的と爲す所にも津々の趣味存すべく、他の以て智的論議を爲す所にも自ら安心立命の礎在致すべく候。一萬五千噸の船を靈岸島に横付けんことは相成まじく、さりて百五十噸の舟にて太平洋横断は無謀に候。

○能登鹿島郡酒井村永光寺に於て、佛教徒同盟會北陸支部發起となり。去月八日釋尊誕生會の祝賀會を開きたるが、非常の聴衆にて頗る盛會との通信に接し、洵に喜ばしく存候。

新刊紹介

片山 潛著 社會主義圖書部  
都市社會主義 本書は第一章東京市を如何にすべきかより脱き起して、第二十三章臺灣問題にて筆を收めたり。要するに本書は食糧飽くなき資本家等の爲めに、市の公共的利益を犠牲に供せられんとするの觀あるは、畢竟市民が都市問題の何たるを知らざるによるるとして、歐米の實例を引照して、凡て社會主義の見地より市政問題を解決せんとしたるもの。今の社會主義たるを否と問はず、都市問題の經營に留意する人は一讀して可也。

西川光次郎著 富の壓制 本書は其名の如く富家の壓制を極力痛論したるものにして、一部の人は歓迎せらるべき書也。文章平易にして難澁の句なき所、著者の用意のある所なるべき。(定價十二錢)

浩々 洞編 春の頌 本郷晴町 浩々 洞 此浩々洞同人誌が過去一年間に於ける靈感と實驗とを飾りなく告白したるもの。之を行るに流麗の筆を以てす。小川の下海深たる響きをきくべく、或は春風面を拂ふの趣あらしむ。以て求道者の飢渴を慰するに足らむかな。(定價三十錢)

家庭雜誌 (第一號) 本郷二丁目 由 分 社 界枯川氏の編輯にして、其理想とするとこは社會主義によりて圓滿なる家庭をつくるにあるが如し。材料凡て最新にして選考多くして興味長し、蓋し近來の好雜誌。(六錢)

ら説明的合理的に相成り申べく、又昨は今非も少からず、徒らに煩瑣なる理路を述べて窮末なげに發露せる光明も俄然直感的に柳暗花明の一村を點出する事も有之べく候。されば生は信仰を以て全然説明的合理的のものと思惟せず寧ろ信仰に神秘的獨斷的の箇處の存在を信する者に候。従て宗教にも神秘的獨斷的の事存在するを否まざる者に候。猥りに標榜自ら地を畫するは如何のものにや存せられ候。嘗て基督教徒たりし人士が後に至りて之を去るは種々の原因あるべけんも一は其所論の淺薄なるに依らずんばあらん、此點に於て生は佛陀の教が廣大無邊にして之を叩く事小なれば小に響き、大にたゞれば大に響くあるを喜び居り候、小乘とて排すべきにあらば大乗とて尊ぶべきにあらざらん、人の子を乗せて五十千を航すべくんば其大小を問ふ可ぬや、要は帆檣の如何に在るべく、人生問題たる見地を離れざるに存すべく候。もし夫れ港頭輝過大艦小艦、巨舟畫舫の秩然として、帆檣林立する底の趣味は眞に佛教の快事に候はずや。

世に教育と宗教との問題は未だ眞面目に研究せられず候、西洋諸國が中世紀の舊慣を襲守して宗教を國民教科の内に加ふるは如何あるべき。生は少年の空想時代にて、未だ人生の徑路も味はぬ徒が宗教を振りまわすは、沈黙の冠せると同トくかたはら痛く存居候。宗教は實験的に得たるものならんはタメに候、体察實験さは此間の消息を脱けるものに候はずや。されば教うる所は理のみ、授くる所は外形のみ、其情を抉し其體を嘗むるは口舌の及ぶ所に無之候、されば教育と宗教とを、しかく外形的に聯絡せしめんとするは無益にして有害に候。然らば其如何なる點に聯絡すべきやは見二三無きにあらざらん、并は後日に譲り候はん、唯教育者が宗教を覗みて願はくは其堂に入り、宗教家は教育の何たるを察して、之を自家藥籠中に納め、互に無用し無用せられて、初めて眞の結合が發見致さるべく今の様に教育者と宗教家と風馬牛の状態に有之候ては、數十年を種過致し候も解決されざるべく候。兄よ教育者として人なり、情に於て弱點あり智に於て短所あるは當然に候、教育者が理想と倫理とを申し候へ共、實際體感に對して十分堪わられざりしは、近時の事例を假るまでもなく候。大海に乗り出つべく其船は余りに小さく候らひしなり。されば今の宗教家が教育や心理を度外視して、依然舊に依て説法布教するは曠くべき事に候はずや、被教育者一感化の當体一を知悉すること無くして、其所期の地に人を導かんとする難からずや、勞して功なきは想すべしとすも人の子を賊するはあるまじき事に候。尤も今日佛敎界の施設が常に末に走りて本を忘れ、行動常に迂遠なるに比すれば又止むべきを得ぬ次第に候。兄よ我佛敎界の濫利たる運動は何日か期し候はん、申し上げ度きこと盡きたるに候はれど、こゝに擱筆致し候胃弱ものは激し易き情とな御一笑下されまじく候不一。

依 田 生

尊き禪師

前略記者足下近來小生をして深く動かしたるは大町氏對田中氏の喧嘩に候小生は特に此處に喧嘩なる二字を用ゐ候、これ兩氏が用ゐられたる言語の餘りに亂暴なれば候、此喧嘩より小生の感したる事柄は外の儀に無之、今の所謂宗教家なるものは如何にも度量の狭きものなりとの一事に候、此頃或る所に承はれる古人の逸話中に、「古昔一人の僧侶ありき、白隠禪師なりしと記載すれども確かならざれば名は省く、德行高く智慧深く、萬象其風を仰ぎて信仰も大方ならざりき、其門前音華を商ふ家の娘、父母の眼つまを盗みて仇し男と契を結び、因果は親面情の種を宿し、袖でも隠すて、二月は早や過つて、今は何人の眼にも止まるべき迄になりければ、父母は一方ならず驚き、其相手の誰れなるかを尋ね問へども中々白狀せず、手代へ品を代へて尋ねらるゝに娘も包む術なかりしものと見へ、顔赤らめながら實は禪師と云ふ後ば得も言はれず泣き伏したり、父母は大に恐れ佛徳ともあがめらる禪師にさる譯のあるべしとも思はれれば、娘が包みに包みて上の白狀なれば是れ亦偽あるべしとも思はれれば、何れ禪師様に御眼通の上實否を糺すべしとて、禪師様にサト内密のお話となれば御眼通りを願ひたるに直ちに御許容ありければ、花屋の主人事の仔細を申上げるに、禪師は落付き拂つて其れは重懲なり、随分大切に養生させ、養生料は寺より遣はすべし、又生れたる子の養育料も取らすべしとの仰なりければ、主人は大方ならず忙れ、何しろ月々の手當を下さる事云へ、殊には尊き禪師のお種なればと、連れ合にも申合め、一方ならず娘を勞はり、安々と出産の後には初孫のこととて掌の玉と鐘愛しけるが、数年の後に至りて娘が契しり男の名も素性も明かに知れしは、夫婦のもの、尊き禪師にあらぬ名を負はせせらる罪今更に恐しく、此あらぬ名を笑ふて受け至ひたるさへあるに、人情の底を汲み玉いて数年の間月々の間手當下されたる禪師の大慈悲今更に尊く、愈信仰の念を固ふしたりしと云ふ、而して此事遠近に聞へて禪師の徳望彌々上に高くなりたり」と。

昭波生

道友會の動靜 (第四高等學校)

現今の道友會は第四高等中學時代の佛教青年會と稱し來りしもの、去る三十年秋北陸佛教青年會と其の關係を断ち断ら第四高等學校内の青年佛教徒を以て組織したるものなり。佛陀の靈光下、跪きて深遠美妙の大法に浴せばやの同志、其名を列る者百名に垂んとす。前校長北條時敬先生在職中は力を盡して大に指導の任に當られ教授西田幾太郎先生、全三竹鉄五郎先生亦幹旋の勞をとられき。當今は西田教授、高橋教授、森内教授等各例會の席上其の蓄積を傾倒して後進の爲に勞を惜まざる者あり。加ふるに高橋教授は來任前仙臺第二高にありて全校道交會の爲に盡慮盡瘁せられ徳望を以て知らる、今や來りて道友會の爲に一臂を付與するを快諾せらる。西田教授等と相待ちて本會の當來を光榮にする者あるは期して待つべき者あり。

(會員 報)

佛教倫理の大觀

全一册

大和綴頗美本 定價拾貳錢 郵稅四錢

眞宗大谷派御連枝大谷勝縁師題字 眞宗大學講師齋藤唯信師著

佛教倫理は廣大である、殊に一切藏經中處々に散在してゐるから又複雑である、之を研究するには専門に従事するも、三年や五年の歲月では充分窮めることはむづかしい、況んや専門家ならざる人にして之を知らんとするに逆も手の附けやうはない、本書は之等門外の人々をして容易に佛教倫理の一斑を知らしむる爲めに、文字は至極平易、文体は言文一致にして、何人にも解しやすきやう書き述べられたるものなれば、今は倫理問題の喧しき時に當つて、佛教者なる人は是非一讀すべき良書である。

發行所

東京神田茶の水 電話本局二九九九

光融館

無盡燈

五月一日發行 第八卷第五號 一部定價拾錢

- ◎ ロッス氏の社會的宗教論 樋口秀雄
- ◎ 安心決定鈔を論ず 曾我量深
- ◎ 安國坊日興上人の不受不施義 石井境涯
- ◎ 再び堅惠堅意の年代を論ず (實性論と起信論との關係) 竹田三省
- ◎ 佛滅の年代に就て(質疑解答) 豊南子
- ◎ 修養に關する病的現象 楠秀丸
- ◎ 親鸞聖人と目蓮上人 村上專精
- ◎ 慧思禪師と其理想的人格 梨谷裕泉
- ◎ 南征日記(其四) 南條文雄
- ◎ 開祖の信條と我等の信條 ◎ 宗教家と社會主義 ◎ 倫理至上主義を評す ◎ 邦人の一大痛疾 ◎ 富豪崇拜 ◎ 宗教と社會的的自我 ◎ 新刊批評 ◎ 近事會報
- ◎ 西藏文妙法蓮華經解題
- ◎ 梵文妙法蓮華經和譯

東京巢鴨 眞宗大學

無盡燈社發行

定價一部拾錢六部  
六拾五錢(十二部)  
圓廿五錢(郵稅共)

# 新佛教

第四卷第五號 \* 四月一日發行

發行所 東京市本郷區駒込片町一六  
新佛教同志會

● 死後他界の生活 田中 治六

▲ 大森閑語 横 橋

● 法華經の眞實 清水友次郎

▲ 春雨の旅 和田不可得

● 謂はゆる新聞記者 甲良 山人

▲ 摘草 村

● 大町桂月氏の宗教論 川瀬 義雄

▲ 文部是文旨 無平無灰齋

● 將來の宗教 (釋宗演) 中島力造

▲ 續訪問餘錄 第二訪問子

● 現今主義と理想主義 融 歸一

▲ 凡語 林

● 主婦たる人の手藝 淡霞 女史

▲ 雜說數則 清水友次郎

● 仁德天皇の御歌 伊藤左千夫

▲ 天竺地履 天 門

● 古今迷信の變遷 加藤 咄堂

# 古蹟

第二卷第四號  
四月十五日發行

會員を募る

口繪寫眞版上總國分寺

東京大塚の儒者棄場

古蹟巡覽記

雜 錄

田中大學助教 佐伯重夫

和學講談所

相模國分僧寺

黒川眞道

青木昆陽一家の墓

甘藷の多にし

永井健之助

東京淺草區に在る名家の墳墓

● 清國國分寺

佐伯重夫

松島紀行

あつさめくみ

木村文學博士

水戸義公の銅像

○古社寺保存委員會

小杉文學博士

○因伯史談會

○菊池家大記録の編纂

○福島縣阿彌陀堂

○楠公銅碑の建設

○三重の古墳

○武藏の古器物發見

○其他調査會記事等

● 每月一回發行

● 定價一冊十二錢一年分一圓廿三錢

發行所 東京市本郷區永田町二丁目二十七番地

大賣捌 帝國古蹟取調會

東京市本郷區東海堂 表神保町東京堂

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著

● 訂正第三版 ● 增補

# 信仰の餘瀝

全

● 定價金十五錢 ● 郵稅一冊に付二錢 ● 郵券代用一割増  
本書は、著者が活火炎々たる自家の信念を告白したるものにして、活ける懺悔、靈感の妙趣此中に存せざるはなし。其説く所卑近に流れず、高遠に失せず。平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りて、よく之を調理し少しも生硬の憂ひなく、讀者をして、曼然胸中 秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。  
今や第三版を刊行するに臨みて、著者自ら筆を執りて、或部分の如きは全く改竄するまでに、嚴密なる訂正を施しぬ。添うるに森嚴なる筆を以て自序をもつし之を卷首に題し、且つ滯歐中日夕拜讀したる聖經に就ての所感一篇を附録とせり。句々皆金石の聲を發せざるはなく、字々悉く熱淚の痕たらざるはなし。苦悶の闇にある人、信仰の飢を叫ぶの士、來りて本書を繙けよ、光明界の指導者たるもの、それ必ず此書ならむ。

發行所

東京市本郷區森川町一  
大日本佛教徒同盟會  
本郷四丁目 文 明 堂

## 規 定

- 一、本誌は毎月一回(八日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全 國
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	無遞送料

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十六年五月七日印刷  
明治三十六年五月八日發行

## 發 行 所

東京市本郷區森川町一番地  
大日本佛教徒同盟會出版部  
(電話下谷二四三三)

## 大 賣 捌 所

東京市神田神保町 東 京 堂  
同 本郷四丁目 文 明 堂

發行兼編輯人 百目木 智 璉  
印刷人 白 土 幸 力

前號要目

口繪

社

清

百

其

俳句等  
他新体詩歌  
翁の経歴を抽き  
目木氏南村閑話蕃根  
に飢餓を醫するの藥石也  
澤氏眞の朋友近角氏信仰談共  
として温容に接するの思あらしめ  
説大聖釋尊はよくその人格を描き彷彿  
印度アヤンタ窟及古僧院に於ける釋尊史  
傳に關する、趣味ある古代彫刻の寫眞石版  
本博士釋尊の說法は佛陀說法の眞髓を  
論し明晰刀を迎へて解くの感あり  
常  
盤學士經の佛陀と律の佛陀は  
うの慈愛と嚴誡とを寫し  
河氏感化事業池山氏  
小  
勞働問題最剋切  
山人の御伽  
連  
話あり